
お嫁さんにしてください (工藤家の事情)

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嫁さんにしてください（工藤家の事情）

【Zコード】

Z8893U

【作者名】

川中流一

【あらすじ】

「どうする？桂木夕葉」

交通事故に遭ってしまった幼馴染のお兄ちゃんを助けるには、お金持の、黒い服を着たいとこ 工藤朔太郎と結婚をすること。本当は大好きなお兄ちゃんのお嫁さんになるのが小さい頃からの夢だったのだけれど。彼が理事を務める転入先の高校の、隣の席の男の子と同級生達と、双子の兄弟と遺産と夢と約束と。愛してるなんて言えない彼と、愛されてるなんてちつとも知らない彼女の多角関係。

【改】は改行せりで、内容は変わません。

夕焼けの告白

【いつもありがとうございます。お勉強をがんばります】

便箋に詰められた文字を読み直してから、一番上の段に【おじいちゃんへ】と書く。半分程に短くなつた鉛筆の先にキャップを嵌めて筆箱の中にしまつた。色は褪せてしまつていて、ピンク色でフアスナーの先が花形になつていてお気に入りだ。

便箋を三つ折に丁寧に畳んで封筒に入れた。のりをしてからぱたぱたと手で扇いでみて、何も変わつてない半乾きのそれを持ってちやぶ台から立ち上がつた。

公園団地を出てすぐ角を曲がつたところにあるポストに手紙を入れる。差込口に指の付け根まで入れるのは、背伸びをして手ごと差し込んでいた頃からの癖だ。ひんやりとした口から手を抜いた。

「夕葉」

振り返ると、サッカーボールを持つた男の子がいた。

「陽ちゃん」

陽ちゃんは同じ団地に住んでいた一つ上の兄ちゃんで、引っ越してしまつた後も夏祭りには毎年一緒に行つて。高校に入つてからは忙しいようではほとんど会つことはなくなつてしまつたけれど。

短く刈り込んだ髪は変わりない。昔から運動神経が良くて、鬼ごっこをすれば誰にも捕まらなかつた。自分以外には。折角遊びに入れて貰つてもろくさい自分はすぐに捕まつて鬼になつてしまつて、それなのに誰も捕まえられなくて、だけど陽ちゃんだけは捕

まえることができた。陽ちゃんは優しくて格好良くて、人気者だった。

偶然会えたのが嬉しくて、笑顔を向ける。

「どうか、帰るとこね。」

「……自手練」

逸らした田を追つて電柱を見たが、雀の一匹もいなかつた。

*

「44、45、46……」

公園のベンチに座つて、田の前でとんとんとコフティングするのを指折りながら数える。

「49、50……あ、」

ぱおんと、高く高く澄んだ空に上がつてから、とすんと吸い込まれるようにまた戻つてきて動きは止まつた。ベンチの隣に陽ちゃんが座つて、前にある砂場をどことなく眺めている。それから、あさ、と言つて口を開いた。

「夕葉、高校は矢羽西？」

「やはは高校に行かない」

「え、」と陽介は驚いた声を出して顔を向ける。

「働くの？」

「お母さんのお店で、お手伝いをする」

ぱりぱりと足を揺らしながら、何気ない様子で答えた。

「それって、」

何か言葉を飲み込んだ陽介とじつと田が合つた。落ちてきた田の光で茶色に透き通る瞳を見つめて、それから慌てて陽介は田を逸らした。

「 タ葉は人見知りだから、接客の仕事つて大変じゃないかな」「大丈夫。ゆははお皿を洗つたり、お掃除をしたりなので」

そつか、とちゅつとだけほつとしたような顔をして、しかしうはり躊躇いがちに聞く。

「お母さんは、何て言つてるの？」

「ゆはは余り役に立たないけれど、ゆはが学校に行くのはとても大変と」

「 でもや、ゆはが本当に高校に行きたいなら、話してみたらどうかな。選学金だつてあるし」

「ゆははあまり学校に行きたくない」

ぱつんとした言葉が会話の糸を断つて、垂れた糸がぱらぱらと二人の間を揺れた。

「……」

「……怒つた？陽ちゃん」

「何で」

陽介は少し面食らつたように彼の小さな幼馴染を見やつた。

「陽ちゃんは、高校に行かない人をお嫁さんにはしない？」

「何で…」

突然の言葉に思わず田を逸らしかけたが、しかし真剣な眼差しに気がついてそのままの田の前に手を伸ばす。

「そんなことないよ」

手はくしゃ、と頭に置かれた。

「好きなら何も、関係ないと思つ」

「好き……」

「え！」

風が囁くような細い声に陽介の耳は朱色に染まり、固まって田の前の女の子をまじまじと見返した。少女は続けてぽつんと呟く。

「ゆはも誰か、好きになってくれる人がいるかな」「夕葉……」

それから何でもなかつたよつて」とんと立ち上がつた。

「では、ゆははそりそりお母さんを起しこななければならぬるので」「夕葉…」

小さな手を掴んだ。

「好きだよ」

真剣な眼差しを夕日のかかる彼女に向けた。この日が落ちてしまふ前に。何故だかそんな刹那の焦燥に駆られていた。

「俺と、付き合ってほしい」

「おつきあい、」

無理も無い。それはおよそ十年続いた安楽の関係の、唐突な終わりを意味していた。この状況をなんとか咀嚼しようと反復する彼女を見て、彼は弁解するように頭を搔いた。

「夕葉のこと……妹みたいに思つてた。俺の背中に隠れて、危うくて、俺が見てなきやと思って。だけど、力を貰つていたのは俺だつた。背中にお前がいるから負けられないって思つ。夕葉に見ていてほしい」

「あの……え、」

彼女が大いに戸惑うのを見て、彼もまた戸惑つた。そして確かに感じたと思った自分への好意は、未だ幼馴染としての範疇を出ないものだと知り恥ずかしさで身が火照つた。もし彼の同級生の誰かに聞かれていてでもしたら、本当に焼け焦げていた方がまだましだと思つただろう。

しかし彼を駆り立てたに違いない彼女の一途な瞳も、彼を動搖させたに違いない言葉も、事実存在したのだ。

無自覚。

彼はそう信じた。戸惑いであつて、拒絶ではないこと。そしてそれは恐らく正しい判断だつたろう。

「返事はまだいいよ」

どこか切迫した空氣から、彼がいつもの柔らかい表情に戻つたの

を見て彼女はほっとした。

今度サッカーの大会があるんだけど、と彼は切り出した。何気ない調子を装つてはいたが、それは彼が将に待ち望んだ舞台であり、それまでの努力は必ず結ばれるに違ひなかつた。ただ只管にこの小さな勝利の女神の微笑みに焦がれていた。

「その試合、見に来てくれないかな」

「くんと、自然な流れで彼女は頷く。彼は依然として自分の心拍が早いのを悟られたくはなく、サッカーボールを持ち上げそれを帰りの合図とした。

しかしポケットに入れた手に小さな包みが当たつて思い出す。それが彼女の色白の手に押し付けぼそぼそ言つた。

もし勝つたら

という言葉を切つて、彼女を見つめて誓つ。

「俺、勝つから」

じゃ、と叫つか言わないかのうちに陽介は背を向けて足早に公園を去つていつた。

「てん、と首を傾げた。花のピンが片耳の上に行儀よく差してある。

雨も降らないのに、一向に試合は始まらなかつた。ただただ何か

+++

慌しいばかりで、ただただ何か不安を煽るだけで、何も始まらなかつた。

「陽ちゃん……？」

サイレンの音がどこか遠くで鳴り響いていた。

おじいちゃんを訪ねて

彼は昏睡していた。

居合わせた人に依ると、人を助けて車に轢かれたそうだった。医者に依ると、脚を切斷しなければならないということだった。親は、彼の目覚めを待つて欲しいと言つた。

執刀は三日後に決まった。

「あああ、あああ、陽ちゃん、陽ちゃん……」

誰も宥められずに、正確に言つと宥められる程身近な人間はず。ただ不憫と氣の毒を思つてこれを止める者は誰もいなかつた。しかしいつまでも、本当にいつまでも大泣きするものだから、遂にはベットから引つ剥がされて、彼女は病院の屋上でそれを続けることになつた。

「あああ、あああ、陽ちゃん、陽ちゃん……」

全く有り得ない事だつた。彼はヒーローなのだ。どんなに辛く悲しいことがあつても、泣き声を聞きつければすぐに駆けつけて全ての苦しみから救い出し、彼女を慰めてくれる筈だつた。

しかし一向に彼は現れず、彼女の声と涙が枯れ尽きてしまつ頃には夕方になつていた。

面会時間が過ぎて彼女はほとんど引きずりわれむようにして病院を出て、病院は漸く厄介払いをすることができた。

泣き腫れて帰ってきた彼女を待つていたのはただいつも汚れた洗い物だけで、母親は家には居なかつた。

ぐずぐずしつぱなしでも真夜中には自分の布団に潜り、布団の中一人ぼっちで彷徨う心は『おじいちゃん』へと向かった。

親戚はこの『おじいちゃん』しか知らなかつた。両親は駆け落ちだつたのだ。おじいちゃんの存在を知つたのは小学校に上がる時で、真つ赤なランドセルが贈られて来たのが最初だつた。それから義務教育の九年間は彼女の養育費が約束され、ただし月に一度手紙を書くことが条件となつた。とは言つても、実際のところ彼女にとつてそれはかなり貴重な楽しみとなつていた。

広告の裏でもなく綺麗な便箋を使って、遠くに手紙を送る人がいるのだ。『おじいちゃん』がどんな人なのかを想像するのも楽しかつたし、想像の中で彼女はひどく可愛がられていた。公園で、スーパーで、孫とおじいちゃんの関係を見てそれを自分にも当て嵌めていたのだ。

自然、『おじいちゃん』は彼女の心に大きく占められるようになつた。例え一度たりともその返信が送られてくることはなかつたとしても。

きつと、助けてくれる。

彼女はそう確信していた。『何から』なのかを考えるまでもなく、次の朝、と言つても冷めやらぬ不安と興奮で一睡もできなかつたのだが、眩しく差し込んだ日の出を合図にしてもそもそも布団から這い起きた。そして顔を洗い、音を潜めて『仕事』を片付けてしまつてから、うさぎの耳のついたリュックサック（小さい頃から

ずっと一緒にいた（を背負い、手紙の住所を頼りに家を出たのだった。

一時間電車に揺られ、運賃の足らないところからは歩いて、空が朱に染まるころに漸く彼女は足を止めた。遂に着いたのだった。そしてぽかんと口を開けて、握り締められていた紙を開き何度も何度も目が行き來した。

それは大きな大きな、大きなお屋敷だったのだ。

彼女は自分の想像からはかけ離れた『おじいちゃんち』に衝撃を受けながら、ただ突っ立っていた。次にどうしたらいいか分からなかつたのだ。

しかしきいと門の横の小さな（とは言つても大人が通るのに十分な大きさの）扉が開き、箒を持った人の良さそうな老父が出てきた。自分が困っていることなどお見通しのようないのタイミングの人に違ひなかつた。

彼女は棒になつた足も忘れて駆け寄り、尋ねた。

「ゆはのおじいちゃんですか？」

『工藤朔太郎』

「お前のじいさんは死んでいる」

ぽけつと前の男の人を見ていた。この人は、誰だろう。

おじいさんの後を付いて行つて、門を入つてから三番田の建物の中、待つように言われて浅くソファに腰掛け行儀良くしていた。おじいちゃん。

だけど入つてきたのはずつと若い男の人で、入つてきて一番にひどいことを言つた。

この人は、嘘を付いている。

黒い服を着ているし灰色がかつた冷たい眼の色で、何か悪い人に違ひなかつた。

次にその人はポケットから薄桃色の封筒を取り出した。あ、と声が詰まつた。それは、それは 宛先と名前が見覚えのある字で書かれている。……開封されていた。

「か、勝手につ」

膝がぴんと伸びて立ち上がりつており、顔を真つ赤にして手を突き出していた。

「勝手に？」

くすりと男は笑い、返すどころか宛名を確かめるように読んでみせた。

「工藤朔太郎　俺の名だ」

「違う」

「違う？」

反射的に返した言葉に、男は面白そうに口端を上げる。

「それなら俺は誰だ？」
「知らない」

男は動いた。自分に向かつて歩いてきた。怖いのに、怖くて膝が伸びきつたまま動けなかつた。

「俺はお前を知つてゐる」

「桂木夕葉　お前は俺のいといだ」

「い、いとい……？」

「俺のじいさんも、『工藤朔太郎』だよ」

この瞬間に彼女は混乱した。ただでさえ混乱でいっぱいなのに、まるでスフィンクスを目の前にして謎を解かなきや食べちゃうぞと言われたような脅迫感に襲われていた。

「だが今は　じいさんが死んだ今は、この世にこの名は一つだ。失くなつた名前と同じ程にな」

ぼろ、と涙が毀れた。何を言つてゐるのか分からなかつた。分からなくなつた。しかし『』の部分だけはくつきりと、心に焼き付き現像された。

「お、じいちゃんが……やはのおじいちゃんが、」

「もう泣くとか？顔も知らない人間の為に」

「そう泣くとか？顔も知らない人間の為に」

彼は背を向けた。

「帰れ」

彼女は真っ暗闇に放り込まれた。がらがらとの音も聞こえなかつた。突然自分はそこにいて、ただただ咽び声が瓦礫の山へと吸い込まれていつた。

「陽ちゃんが……陽ちゃんはつ……」

「『陽ちゃん』？」

ちらと田を向け、手持ち無沙汰に封筒をこんこんと机に当てる。

「手紙に書かれていた奴か」

「助けてください……」

言いながら、彼女はへたへたと床にしゃがみ込んだ。鼻水と涙で顔をぐちゃぐちゃにして、ただ助けを求めた。彼女にはもう望みが無かつた。自分のいとこだというこの目の前の男以外には。

男は何も言わずに彼女を見下ろしていた。

「ゆはをお嫁さんにしてくれる人です……！」

ぐい、と顎が掴んで持ち上げられた。睨まれている。

「嫌いだ」

忽ち涙に濡らされていく手を離して、彼は蔑むように彼女を見下ろした。

「ぐだらねえ茶番は終いにして帰つて母親に伝える。娘を寄越したつてあんたに渡る遺産は一文もないくてな」

「お母さん……？」

「水商売の、あんたの母親だよ。御曹司の次男を誑かしたはいいが、頼んでもいよいに駆け落ちされ、拳句にガキだけ作つてさつと早死にされた幸の薄い女だ」

「お、お母さんは」

これには彼女も物申さんと顔を上げ、ふるふる震えながらも睨み返す番だった。

「いいお母さんです。ねばがきちんと生活ができるのは、お母さんのおかげです。悪く言わないでください」

しかし全く悪びれた様子もなく男は肩を竦めた。

「よくできた躾だな。自分じや巻き上げた『養育費』でブランドのバッグを買っておいて、そんな貧相ななりをさせてくる子供に感謝されているなんて」

彼女は『決別』する事にした。この人は悪い人で、陽ちゃんを助

てくれる人ではない。

何も言わずに彼女は立ち上がった。

お母さんを悪く言う人を相手にしてはいけない。 そう、 陽ちゃんが励ましてくれた言葉だ。 そう思うとさつきまであんなに怖かつたのに、今はしゃきりと立つことができた。

後ろでとさ、と音がした。 束になつたお札が床に落ちていた。

「『病気の一人娘』に見舞いだ」

一瞥して彼女は立ち去った。 ぱたんと戸がしまった後、くつくと男の口が歪む。

「陽ちゃん……」

手を取つて、ひりひりする自分の頬に当てた。いつしもりつといつも痛みが引いていくのだった。ぐじぐじした胸の痛みまでも。

物言わぬ彼が横たわる白パイプのベッドに、ぼすんと頭を乗つけた。シーツからは陽ちゃんの匂いがする……気がした。陽ちゃんは眠っているだけだ。明日、脚が無くなるだなんて嘘だった。

「好き……」

『ゆびきりげんまん』

返事なんかずっと口にしてくるの。』

こんこん、とノックがされた。頭を上げると、お医者さんが何人も入ってきた。白髪を付けた一番偉そうな人が自分の前で止まり、それから次々と若い医者まで居並んだ。こちらが件の患者です、と何だか冷や汗を描きそうな聲音で言い、はげ頭の後ろから誰かが一步前に出た。　白い中、ただ黒。

は……と息を飲むや否や、それはもつ反射的に陽ちゃんを庇つてその前に立つた。

「奇遇だな、桂木夕葉　そして手間が省けた」

昨日の男だった。彼女なりの威嚇の目を向けると、ふ、と男は笑う。

「田比谷陽介の脚は治る」

え、と思わず声を発してしまった。

「で、でも」

縋りたいのと、信用してはいけないと。お医者さんを見た。治る可能性はゼロだと、そう言った。腱がずたずたで、義足にする以外もう一度と自分で立つことはできないと。

「責めてやるな。特にこいつらだけが無能って訳じゃねえからな」

薄い唇で微笑して、男は事務的な口調になつて続けた。

「手短に言おう。アメリカに外科医の知り合いがいる。資料を送らせて訊いてみたところ、スポーツ選手としての復帰までは保障できないが、少なくとも日常生活を送るのに不便はない脚にはできる勿論、自分が執刀すればの話だが、といふことだ」

彼女の頬にみるみると薔薇色が差すのが見て取れた。男の口元は何故だか笑う。

「『奇跡』の値段は三千万 安いもんだろう?」

吃驚して田が開く。

「ちなみに今の話は4時間32分前の話で、手術の成功精度は時間とともに下がっていくし、後一日遅れたら自分にも手は負えないだ

るつ、ということだ。まあ鬼に角、後19時間程の猶予はあるといふことだ。いとこのよしみでジェット機くらいは貸しやるつ

「どうする？桂木夕葉」

明らかに何か楽しんでいる口調だつた。彼女の拳は震える。人の葛藤と屈服を楽しんでいる。昨日、先に無礼をしたのはそつちなのに、少しでも思い通りにできなかつたことへの報復なのだ。でもそれしかなかつた。彼女の唇は震える。

「……絶対に、返すので
「断る」

信じられない。こんな、こんな酷い人間がいるなんて。十分辱めた後で、こんな、絶望を楽しむ為に希望を与えたのだろうか。

「なんなんだ？その顔は。昨日『初めて』会つた人間に、金を貸さないというのがそれ程の畜生か。俺は鬼でも仮でもねえしこは天国じゃないんだぜ？」

「お願ひします……」

それでも彼女はしゃがみこんだ。額をこつんと床にぶつけた。医者達はちらちらと視線を左右にさせながらも何も言わないでいた。

「俺の言葉に『言はねえ』

彼は無情に言い放つた。

「まして人を苛める趣味もねえ」

「これは絶対に嘘だ、と場に居合わせた良識ある誰もが思った。

「俺が訊いたのは、零細にでもお前自身に払い得る可能性があるからだ」

彼女は頭の上から降つてくる言葉の意味が全く理解できなかつたので、男の表情を読もうと顔を上げた。医者達も各自可能性を模索してみながら男の次の言葉を待つた。

「確かに前の母親にはじいさんの財産に関して一切の権利はない。ただしその娘 工藤財閥元会長、工藤朔太郎の孫娘についてはある条件を満たした場合はその権利を擁する、と遺書には記されてあつた」

「条件……」

誰かがこくと唾を飲んだ。注目を鬱陶しそうにしてじろりと男が睨むと、医者達はそそくさと会釈をしてから病室を出て行つた。眠つてゐる少年を除けば、病室には一人だけがいた。

「義務上お前に告げる」

眼は笑わず、口元は小馬鹿にしたような横柄な態度で男は告げた。

「その孫娘が、工藤本家家族の家系に組み入れられた場合、だ」

「……？」

「しかし養子は無理だらうな。お前の大好きな母親が今日中にお前

を手離すことに同意したとしても、肝心な、一応の家長である俺の父親とは連絡が取れない。宇宙にいるらしいからな」

「宇宙……」

ぽかんと口を開けた。取り敢えず彼女の想像力が反応できたのはその言葉だけだった。

「どう思う?」

そう言われても、と小首を傾げる程の親しさは見せたくなかつた。

「さつき断ると言つたが、正確には俺にも無理だ。何故ならじいさんがこう遺して逝きやがつた。『家を継ぐと言つ明確な意思を示し、工藤姓において婚姻もしくは確實な婚約が為されるまでは遺産相続に関する一切の権利を保留する』長男に宇宙に飛び出され次男に駆け落ちされ、自由で勝手な息子達に余程堪えたんだろうな」

「まあ、俺にとつてはそう大した話でもねえ。そもそも継ぐのが自然の流れだし、いざれ適當な女も娶るだろう。わざわざ念押しされなくとも夢だの女の尻だの追いかける奴の氣の方が知れねえよ」

さて、と言つて彼は田の前の娘を見据えた。

「俺の義務はここまでだ」

じゃあな、と言つて男は踵を返して出て行つた。

一人になつた。

何?結局今の話は何だったの?義務?今告げることが?陽ちゃん

は……？

三千万……ゆはが支払える可能性……遺産、家系に……養子でな
くて

『婚姻』

ぞぞぞと脳天を突き抜けるよつた電流が走つた。がらんと戸を追
いかけ、走つた。会談を駆け落ち、走つた。男の背。

「待つてくださいー。」

「断る」

はあはあと吐く息が白く、そして消えていく。ダメ。絶対。お願
い、これしかない……

「確かにその通りだ」

男は溜息を吐きながら答えた。

「ただ嘆くだけでなく、ただ縋るだけでなく、お前が自らの犠牲を
買つて出たことについては見直そう。 だがまだ甘い。何故俺ま
でが、その犠牲を払わなきやならねえ？ それとも、自分が申し込
みさえすれば誰だって男は諸手を挙げて喜んでくれるだろ？ と、そ
う思つてゐるのか？」

見据えて、男は語調鋭く突き返した。

「お前との結婚なんてお断りだ、桂木夕葉」

沈黙が落ちた。胸が焼け切れるように熱い。喉がひりひりする。
もう走れない程走った。

「 だつて……」

頬が濡れて、空気が熱を奪っていく。

「何で話したか？」

少し考える素振りをして、ゆっくりと男は口を開いた。

「そうだ。遺書の処理に関しては、本来ならもう少し落ち着いてから弁護士にでも任せようと思っていた。だが昨日、突然お前の方からやってきて『今』金を必要としていることが分かつた。金はいつでも同じ価値な訳じゃねえ。お前が俺に切迫した状態であることを知らせた為に、俺にもお前の利益に関する部分を速やかに話さなければならぬ義務が生じた」

事務的な言い回しは彼女に何も伝えていなかつた。無言でじっと見つめる様は心理的な説明までも要求されており、やれやれと彼は続けた。

「俺も理想の結婚を求めている訳じゃねえし、遺産騒動は長引かねえ方がいい。だからまあ、些か急ではあるが、いとこ同士の婚姻が合法である以上、益が一致すれば結婚という契約も有り得ると考えた」

一息吐いて、頬りなさげな薄い色素の瞳を見た。

「だがお前は違うな、桂木夕葉。お前にとつて結婚は、理想そのものだ。割り切れないだらうし、割り切る必要もないだらう」「でも、陽ちゃんが……！」

「冷静になれ。死ぬ訳じゃねえだろ。それともお前がそれほど懸命になる日比谷陽介という男は、脚を失うよりお前を失うことを選ぶ男なのか？」

違う。違う。陽ちゃんの、夢だつた。小さい頃から、高校の冬の大会に出るのが……。やははいつも陽ちゃんに助けてもらつていた。やはに出来ることがあるなら、何だつて やつ、何だつて……

「結婚してください」

「名前も知らない男と？」

「工藤朔太郎」

何十回も書いた名前。

突然背をしゃんと伸ばして向かつてきた少女に、呆れたよつに男は首を振る。

「不本意だ。甚だ不本意だ。理想を求めはしないが、幾らなんでも他の男を想つているのに無理矢理結婚させられた、みたいな態度を取られるのは余りに俺が不憫だ。月並みな意見だが、俺は不誠実な結婚はしたくないしされたくない」

「やはは、誠実でいます」

「憐れだな……この状況に関わつている全ての人間が憐れだ。しかし俺も些細にでも足を踏み入れてしまつた以上、多少の責任はある。もしもお前に偽りのない覚悟があるなら、俺も誠意を以つて応えよう」

男は見据えた。

「日比谷陽介と今後一切の接触を断つ覚悟はあるか？」
「はい」

そのままの表情で、搖ぎ無い口調で少女はそれに答えた。

「 驚いたな」

彼はその顔に迷いを見出そうとした。 静かな水面に石を投げ込む
ようにな。

「俺に従えるか?」

「はい」

彼女の表情には一瞬の躊躇いも認められなかつた。 本当に、全て
を投げ打つてでも果たさなければならぬらしい。

「 ゆはを、お嫁さんにしてください」

+++

日比谷陽介の手術は成功した。

黒電話で男が話している時、同じ部屋にいた。 とは言つてもその
会話は英語であつた。 英語は点数のいいほうだつたのだが、あえなく
自力で解読することは適わず、その最も重要な箇所が分かつたのは、
電話の初めの段階で男が会話を区切り事務的な口調で彼女に結果を
告げたからだつた。 無感動な彼とは対照的に、彼女は思う存分に喜
びの海をたゆたつていた。

「 礼はいい」

しかし突然その会話が日本語に変わった時、ぎくつとうる。

「ん? 桂木夕葉の婚約者だ。一週間程前からな

瞬く間に潮は引いて、砂と隠すものない自分がぽつんと残つた。

「どうこつ、と言われてもなあ……知らない方がいいんじゃねえか?」

「ああ? こる。代わるか?」

黒い受話器をこりから突然突き出されてしまつていて。ぶんぶんと首を振る。

「接触、しないつて……」

いつなつてしまつた以上、むしろそれは彼女の方から望むことだつた。

「最後の別れくらこせませやるよ

くすりと笑つてそのままでは、それは出でとこつ命令だつた。

両手で持つて受話器を耳に当てる。

『 わは？』

声。本当の、陽ちゃんの声

「 陽ちゃん……！」

『 夕葉ー』

ぼろぼろと涙がこぼれた。陽ちゃんにも分かっている。自分が今どんな表情でいるか、陽ちゃんが今どんな表情でいるか、声だけでお互いに分かるのだ。

ぱたんと静かに扉が閉まる音が聞こえたが、男がいよしがいまいが何も関係なかった。

『 夕葉、今別れって、一体何が』

「 陽ちゃん……！」 彼女は叫んだ。

「 勝つて、陽ちゃん。ずっと……！」

がむしゃらと、受話器を置いた。

「高校には行かないだと？」

男の片眉が均整を崩した。

「はい、もつ出願は終わってしまっているので……」

「これはどうじょうもない」とだった。

「仕方ない」

男はやれやれと溜息を吐いた。

「お前になじいで生活してもらつ 近くの私立高校に通つ為にな」

話を聞いていたのだろうか。だから、例え私立だらうともつ今年の受付はどこでも終わってしまつてしまつていて、

「じいさんが理事長だった。 つまり、今は俺が理事だ」

つまり、横暴が利くといつてじりじり。

「中高一貫校だ。すぐに転入の手続きをしておくから、明日からはそこに通え」

「え」

とは言つたが、この時彼女を感じた抵抗は恐らく『普通』とは違つていた。

出て行く分にはいい。学校は授業が終わつていて皆受験勉強に必死だし、彼女がいようがいまいが誰も気にする人はいなかつた。このところ彼女が学校を休んでいることに気がついている人が何人いるだろうか。卒業式にしろ、もし出席しなくてもいいのならその分カメラからこそ逃げ回る必要がなくなるというものだ。

彼女は写真というものが好きではなかつた。ぽつんと一人でいるのを記録に残す必要があるのだろうか。撮つてくれる親もいなければ一緒に写つてくれる友達もいない、小学校の卒業式　あの時は陽ちゃんが来てくれた。

だけど、今はいないのだ。

どこに行つたつてこれからは一人ぼっちだつた。その上いつも中途半端な時期に入るというのだから、もしかしたらという仄かな期待すら持つてはいけなかつた。

「……高校に行かないといけませんか」

はあ?と男は呆れたように見やつた。

「当たり前だろ。俺の嫁になりたいなら一定の教養くらいは身に付けてもらつ」

「お嫁さんになるのに高校は関係ないと言つていました……」

独り言へりいに小さな声で言つと、は、と一笑に付された。

「好きで結婚した場合だろ」

全くその通りだった。抵抗といつより比較をしてみてつくんと胸が痛む。

「…………やうこえば、」

「ひらりと皿を傾けると男はふと思いついたようにペンを回す。

「日本の教育機関は春が区切りだったな。 丁度いい、お前の転入は始業式に合わせよう」

危うくお礼を言つてしまいそうになつたが、その前に、どうせそのままじゃ付いていけないだらうしな、と嫌味が付け足された。

ひつひつひつきさつで桂木夕葉は工藤家に住み込むことになり、ひと月後の高校入学に向けて一日のほとんどに家庭教師が付いた。その生活は彼女が漠然と考えていたよりずっとましなもので、その理由は男と顔を合わせるのが夕食の時間くらいだった事に拘る。三時のおやつが出ることも彼女を喜ばせた。

そうしてあつとこつ間にひと月は経ち、すっかり引きこもりの生活に慣れた桂木夕葉が高校に通うという事態を思い出したのは、その制服が届いて試着することになつた時だった。

私立修学院高校 入学には家柄や資本が考查され、一般には門戸を広くしていらない つまりこの良家の子息子女の為に開かれた学校だった。

そんなことを知る由もなく、彼女は鏡を見ながら、少し短すぎる

んじやないかとスカートの端を指でできるだけ伸ばしていた。

「短すぎない」

始業式当日の朝、その制服を身に着けて朝食の席に着くと男は眉を顰めた。

初めて意見が合った瞬間だつた。

彼女は云われなく睨まれたが、幸い傍らには着替えの手伝いをした世話係がいて、初めからそういう、つまり膝上丈の寸法だつたと弁護してくれた。

「信じられないことだな」

男は倦怠気に溜息を吐く。

「だが学校経営に關して構つて いる程の暇はねえ。制服を定めたのがじいさんではないと信じるに留めよう」

そうしてパンにバターを塗り始め、それ以外には大して会話もなく無事に朝食は済んだ。因みに、これが朝食を一緒に食べた初めての朝だった。

学生手帳を検分され、摘み出されそうになつた容疑は晴れて漸く学校の門をくぐれた。この時点で何か『今までと違う』違和感を感じ取つた彼女だったが、これについては普段からそれほど厳重な検

分が為されている訳ではなく、あまりに彼女が挙動不審な態度を取つていた為に門番に見咎められたのだった。

余裕を見て一時間も早く学校に到着した彼女の判断は正しかつた。というのも、彼女は次には敷地内を彷徨つていた。何故だか周りを雑木林に囲まれた小路にいて、途方に暮れていた。そんな時に雑木林の向こう側から人の声らしきものが聞こえ、思い切つて突つつてみようと決心をした。

えい。がさごそがさごそと、道でないところを搔き抜けると、彼女の聽覚は正しかつたらしく遂に視界が開けた。その瞬間だった。

ばつん

何かに突き飛ばされて彼女は地べたに転倒した。

「あ、あーっ」

という声が聞こえて、すぐさま手を引っ張り上げられる。

「「めん、「めんね！大丈夫？」

ジャージを着た活発そうな女の子が、必死に手を合わせていた。どうやら走つていたところに茂みから突然飛び出してしまつたせいで衝突してしまつたらしい。次に続けて走つてきた女の子がとん、と軽やかに立ち止まる。さらさらとした黒髪を一つに束ねた、綺麗な女の子だった。

「何してんの？茜」

「ぶ、ぶつかっちゃつた……どうしよう」

「まあ、取り合えず移動した方がいいんじゃないかしら。皆走つて

くる」

ね? と「んじゅ」と微笑むと、手を引っ張られて石畳の方へと導かれる。

「邪魔」

え、と吃驚して見上げるが、表情は微笑んだままだつた。空耳かもしれない。

「ねえ、大丈夫?」

ぶつかつてしまつた方の女の子が走り寄つて来て申し訳なさそうに訊く。

「んじゅんと慌てて一度頷くと、

「急いでるんじゅないの?」

と綺麗な女の子が「んじゅ」。これにも「んじゅん」と頷いて、ペコリと頭を下げるから急いで振りで石畳を進んでいった。幸い校舎のりしきものが見えていた。

「見ない子ね」

「うん……ていうか、なんかあの子」

「なんか?」

「萌えつ。ちつちつち。『せゅつ』したい。中等部かなあ」

「高等部の制服だつたけど?」

「えーつ、でもあつちつて中等部の校舎じゅない?」

「まあ、確かなのは制服と校舎のどおりかを間違えたといつことね。

それと、私達は今朝練中だつてこと…」

「ふあい……なんだつて始業式から……」

そんな会話が為されているのは露知らず、桂木夕葉はメモを両手に自分の番号の下駄箱を探していた。

夕葉と始業式

結論から言つと、桂木夕葉は初日から大いに遅刻した。

学校に一時間前に着いていたのでは全く不十分だったのだ。

彼女が自分の教室の席について一十分も経つたところで、同じ席の人が現れた。

ぱつぱつと居た人とも自分の制服だけどこか違うので少しおかしいとは思つていたのだが、この『同じ人』の登場によりおかしいのは自分だということが決定的になり、彼女はすごすごと教室を出て行つた。

それから彼女は階段下の見つからぬところで泣きべそをかけているところを用務員に発見される。彼女が言われたとおりに学生証を出して見せると、また全く違つ場所へと連れて行かれた。そもそも建物からして違えていたらしい。

それで、正しいらしい教室に案内されたのだが。

しかし誰もいなかつた。

当然の如く、始業式の為に皆講堂へと移動していたのだ。

しかし用務員さんはそろそろ始業式も終わる時間だというのでものまま教室で待つことにした。

諭されたのだ。

実際のところ、用務員としては自分の仕事がまだ残つていたし、案内しているのは手間だつた。

もしも彼女が工藤家に関わる人間だと知ついたらそんな手間を惜しんだりはしなかつただろうが。

しかし桂木という苗字は聞き覚えもないし、おどおどした態度を見るに大した家の出でないことは一目瞭然だった。例え新任理事の挨拶を聴きそびれたからと云つて、何か困るでもひつ眉も無い。

……から、 理事長 超……だつたじやん……

がやがやと廊下がざわめいてきたのは、座つてから悠一十分は経つた頃だった。

ぎゅっと縮こまつて顔を俯いていた。
がらんと『』が開く。

「一番乗り！ じゃない、あれ？」

顔を俯けていたが、自分の事を言われているのは分かつてますます俯く。

「あーっ朝の子！」

その声には聞き覚えがあつた。瞬く間に自分の前に脚が見える。
二人分。

「ねえねえ、名前なんていうの？あ、朝は『めんね。あたし、今村
茜！』

「か、つらぎや……ゆうは
「な、なんとこい」とだ……」

吃驚されたことに吃驚して思わず顔を上げる。神妙な顔をしてまじまじと見られていた。

「君、私と契約して声優になつてよ。」

「え」

吃驚してぽかんと口を開けると、急に抱きつかれた。

「もつダメだ……この子持つて帰りたい。ねえ、いいかな葉ちゃん」

「邪魔だ」

答えたのは低い声で、びくりとする。

それと同時にぱ、と放されて視界が開けた。

黒髪で田元涼やかな 瞳の色が空色の、そしてどこか不機嫌そ
うな男の子がいた。

今村茜はどこかしゅんとして脇によけ、男の子は何も言わずにそ
こを通つて隣の席に着いた。

「状況からして、」

綺麗な子がさらりと言いながらその後ろの席に座る。

「誰が邪魔なのは明白なのにね」

自分のことが言われたのだと思つて竦むが、

「ねえ、霧崎君？」

と続けられてほつとする。しかし男の子は無視をして面倒をつけて杖をついていた。

「元に黒子がある」と、ちらりと皿が合つてしまつて、慌てて皿を逸らした。

茶つ毛を短く刈つた髪の男の子が現れ、今村茜の背をぽんと叩く。

「茜、何突つ立つてんだよ。席出席番号順だろ」

「つひせこ達也。気安く触んな」

なんともつれなく言つて、今村茜は自分の席へと戻つていつた。

「いなかつたな?」

「うぐ、と黙つて俯いた。始業式のことだ。

そうしていふと、顎を掴まれて強制的に向かわれる。

「あまり反抗的な態度を取るなよ、桂木夕葉 お前が約束を守らないなら、当然約束は『白紙』に戻す」

外す術なく視線を合わされて、その瞳の冷たさを知つた。そしてどこか音楽の一節でも口ずさむような調子で囁く。

「日々谷陽介の脚は何時だつて壊せるんだからな?」

行け、と言われたと同時に彼女は背中を向けて走り出した。部屋に入りベットに潜り込み、声を押し殺して泣いた。

隣の席の男の子

「教科書、忘れたのか」

「ぐんと頷いた。

正確には忘れたのではなくどうしたら準備できるのか分からなかつたのだが、兎に角彼女はそれを持つていなかつた。ただ彼女の色褪せた筆箱を置いて、じつと授業を聞いていた。ノートすらなかつた。

しかしその状態が長く続くことはなく、隣の席の頬杖をついた男の子が割と早くに気が付いて、教科書をよこしてくれた。見ないから使え、との事だつたが彼女はきちんとお礼を言つてから、若干の間隔を置いて並んでいる机をいそいそとくつつけ、その間にことんと教科書を開いて置いた。彼はちらとその教科書で繋がれた境界線を見ただけで、別に何も言わなかつた。

その斜め後ろの席でこの一部始終を見ていた日下葉那くさかはなにとつては、全く意外な展開だつた。

典型的に、あるいはもつと酷い程度に内気な筈の桂木夕葉が、未だまともに口も訊いたことの無い男子に対して、『ごく自然にこれをやつてのけたのだ。

しかもこの場合の彼は、特に女子にとつては極めて近づき難い存在だつた。それは仮頂面であることはまた別に、別格の目で見られてゐる為だつた。実際のところ、私立修学院高等部の女子生徒の中で何の気圧されもなく彼に口を聞けるのは、完璧に『つり合つ』家柄と才色兼備を持つ日下葉那くらいだつた。

だが彼女 桂木夕葉にとつては、それは全く自然の行動だつた。

彼女が人との出会いで第一印象を覆す事は稀だったが、まさしく彼は例外だった。初めこそ彼女もその他の人に對してと同様以上に彼に怯えていたのだが、机の傍で彼の友人である早川達也とのやりとりが耳に入るにつれ、瞬く間にその緊張を解すことになった。

彼はサッカー部で、霧崎天輔と言つ名だつたのだ。

『サッカー』
『ようすけ』

これで悪い人の筈がなかつた。

彼女は彼が彼女の絶対的な味方であることを一瞬にして悟り、そしてその直感はこの『何も言つていないので困つている事に気づいて助けてくれた』ことで確信に変わつた。

それはまさしく、陽ちゃんが与えてくれる安心だつたのだ。

そういう訳で、彼がこれまで終始一貫して無愛想だつたにも関わらず、彼女はすっかりと彼に 的を射た表現で言つと、『懐い』た。

ところで彼、霧崎天輔はこの時を境に突然『天ちゃん』と呼ばれ出しても初め全く反応を返さなかつた。しかし彼女が懲りる氣も悪氣も全く無かつた為に、三日も経つととうとう面倒になつて諦めた。彼の友人さえも『達っちゃん』と呼ばれ、そのことに対しこの友人の方では何のこだわりも見せなかつたことも理由の一つにはある。

彼女が何故『達っちゃん』と呼ぶようになったか
彼女は聞いてしまつたのだ。

「高校サッカー界において、『日々谷陽介』の右に出るものはない」

と早川達也が力説するのを。

そうしてサッカーリーグの開幕初戦から忽然と姿を消してしまつた謎について議論が及ぶと、彼女は口をんで断言した。

「陽ちゃんは戻ってきます」

これには驚いて、桂木夕葉が彼の幼馴染であるといつことが分かると二人とも興味を示した。

実は天輔がサッカーを始めたきっかけは自分が連れて行った「日々谷陽介」の試合を見てからだ、という話を聞いて彼女は誇らしく、そしてますます隣の無愛想な男子に親近感を覚えるようになつた。幾ら彼が、それは決して憧れなどではなく打ち倒したい為だと言い張つても、彼女はその根底にある尊敬の念をしっかりと感じ取つていた。

何故なら陽ちゃんも、自分が認める選手（度々プロも含めた）の名を挙げ、いつか同じフィールドで戦つてみたいと言つていたのだ。

彼女は誇らしかつた。陽ちゃんは皆にとつても大切で、自分は正しいことをしたのだ。

この高校生活といつのは、彼女が考えていたよりもずっと彼女に優しかつた。

しかしひらひらのスカートも気にならなくなつてきた、入学から一週間後に彼女は大変な思い違いをしていたことを知ることになる。

「お前、教科書を買つ気はあるのか」

そう、言われてしまつたのだ。

途端に、じわ、と涙がせり上がる。

買えないのだ。彼女には、もう手に入らないものだった。教科書と言つのは幼馴染のお兄ちゃんからお下がりを貰つもので、彼女にはもうその人はいなかつた。

焦つたのは彼だつた。

率直な疑問の部分もあつたが、彼としても慣れてきて、このよそよそしく馴れ馴れしい少し不思議な少女を、半分からかうよつな心持で言つたのだつた。

それが、一体どういふことなのか桂木夕葉は目に涙を溜めている。彼が女子を泣かせるよつなことは、あつたが、それは彼の自発的な言動に依るものではなかつた。そう彼は信じてゐる。しかしこの場合は違う。彼が驚いたのは一つには急に泣き出した桂木夕葉に対してもだつたが、もう一つにはそもそもそんな軽口を叩いた自分に対してもだつた。

ちらほら様子に気が付いて、クラス全体がなんとなく、泣く女子と泣かせた男子に注目を向け始めていた。

そしてまさにその絶妙なタイミングで、背後の席から教室によく通る声が状況を説明した。

「教科書くらいい貸してあげたら? 霧崎君」

彼は振り向きざま睨み、そして教科書類を隣の席に押しやると何も言わずに教室を出て行つた。

……そうしてこの日から、思い出した様に彼女の受難が戻ってきたのだった。

はじめての仮病

『天ちゃん』は全く他人のようになってしまった。

それと同時に、彼女は誰ともしれない悪意の所作 所謂『いじめ』の類を受けるようになった。

その日の午後にはもう、画鋲が靴の中に入れられていたことから始まつて、朝学校に来ると上履きの靴紐が鋏で切られていたり、口ツカ一には泥が入れられていたりしていた。

それは間接的だつた。彼女に直接的な危害を及ぼす者は一向に現れず、そういうた行為が際立つてエスカレートすることもなく、ただ単調に、地味に、色々な場所で色々と人の悪意による不都合が起つた。

これに誰もが気が付かなかつたというのが最大の不幸だつた。

彼女本人が言葉にして訴えない限り分からぬよう、ささいな、悪戯程度のことで止まつていたのだ。

どうして堰を切つたようにこんなことが始まつたのかは分からない。ただ何か、きっかけだつたのだろう。

大した家の出でもないであろう平凡で氣弱そうな女の子が、『彼』に慣れ慣れしく接している姿は彼女が思う以上にずっと目立つていたのだ。

『日下葉那』なら許せる 家柄も、容姿も、能力も。

二人並べば誰しも溜息吐いてしまう。

皆それを了解して、あるいはそうであるから諦めていたのに、あらうじとかその彼女の目の前で、わきまえのない態度を取つてゐる

のは許されるべきことではなかった。

新参者に恥を知らせなければならなかつたのだ。

しかし彼女は分からなかつた。酷く傷ついた。これまで『居なくてもいい存在』ではあつたけれど、明らかな悪意を向けられるようなことは初めてだつたのだ。

尤も、それまでにも似たようなことになる可能性は十分にあつたのだが、『日々谷陽介』の場合は彼女が『妹』であることを明言していくためにこれを免れていた。

実際に彼らの関係を見るに微塵もそれ以外の気配を感じられなかつたし、むしろ彼の前では彼女に親切にしてやる方が賢いやり方だつたのだ。

彼女は、受け入れた。

そもそも此処は地獄だつたのだ。それを忘れかけていたのがいけなかつた。

不機嫌ないところは怖いけれどぶつよくなことはしないし、婚約者だからと言って何か特別な関係になろうという素振りは一切なかつた。だからまるで養子に来たような気分にもなつていたのだ。

そんな『浮かれた』気分でいたことと自分の慣れ慣れしさを恥じ、大好きな人の為に引き換えた本来受けるべき受難を大人しく受けることにした。

しかし遂に、彼女の問題だけでは済まされないことが起つた。

ずたずたに切り裂かれていたのだ。彼女が『借りた』教科書が。

これには青ざめた。

隣の席の男の子が押しやつた教科書は所有権が曖昧になっていた。返せる雰囲気は拒否されていたが、かといって別に彼女のものになつた訳でもないので持つて帰るのも気が引けた。それで、机の中に入れつ放し 所謂置き勉をしていたのだ。

しかし借りている以上、その管理不足は彼女の責任だった。彼女は朝早く誰よりも早く登校して席についているのだが、これを見ると咄嗟にそれらを自分の鞄の中に押し隠した。

どうしよう。

親切な持ち主にこの惨状を見せることなんかできなかつた。

時を刻むかちこちという音が彼女を脅迫し、遂に彼女は逃亡した。怯えながら、ほとんど駆けるようにして来た所を逆走していった。途中誰かとはすれ違つたかもしれないが、彼女は俯いて走つていた。

『家』に帰つた。

いつもは車で送迎されていたが、彼女は車窓をじつと見ていたので帰り道は分かつっていた。つい最近に七時間も歩いたことのある彼女にとつては、一駅一駅分程は苦でも無かつた。

帰つてきて見つからないように はできなかつたので、門の人、お世話の人には腹痛を訴えて自分の部屋のベットに包まつた。

医者を断固として拒否してから、薬やら湯たんぽを持ってくれたお世話の人にはとにかく寝たいと言つて一人になつた。罪悪感を感じ、また初めての仮病にドキドキしながらも一時間も経つともう安心と見て本格的に寝てしまおうとした。しかし甘かつた。

『彼』が入つてきた。

「どうした?」と訊かれ、「腹痛だ」と答えた。

彼は笑つて、もう一度訊いた。

「どうして仮病をしている?」

寝込むような腹痛の奴が、初めての道を走つて帰つてくるか?
尤もだつた。

彼女は素直に半身を起こした。

「教科書が欲しいです、朔太郎様」

「自分で買え」とのことだつた。

そんなことができるならとつくりにしている。

彼女は一銭だつて自分のお金を持つていなかつた。道で見つけたりしてコツコツ貯めたジャム瓶のお金も、あの運命の始まりの切符代にひっくり返してしまつた。

そして病院で婚約をしたその流れで工藤家に連れてこられ、勝手に親の了承を取られてそのまま住み込むことになつたのだ。
家に帰る切符代も無いのに、どうしてあの高価な本に手が届くだろ
うか。

彼女が目を伏せる様子に、彼は少し溜息を吐いて補足した。

「カードをやつただろ」

カード? なら確かに渡された。彼女は初めて手にした定期券に内心有頂天だつたが、しかし毎日車で送迎された為にそれを使う余地はなく、大切にという程ではないが失くさないように引き出し

にしまつたままにしていた。

「そもそも」の一週間、教科書をどうしていたんだ？」

借りていた、と答えた。彼は思い切り顔を顰めた。
そしてどこ家のだ?と訊かれたので、親切な男の子の苗字を答えると、ち、と舌打ちをした。

「『霧崎』の人間にあまり関わるな」

そう言つてから、まあ分かった、すぐに手配せよ。と言
い、一冊ずつ欲しいという要望にも特に気に留めた風もなく応じた。
そして『カード』がお金の代わりになるという省かれてはいけなかつた説明も為され、今後必要なものは世話係りに言つが自分で買
うということが申し渡された。

それからちらと田が合つと、買い物に付き合つか、と形式上訊か
れたが彼女は慌ててこれを断り、一人で大丈夫だということを伝
えた。案の定「それに越したことはない」と彼も言い、そして恐れ
ていた以上には何事もなく部屋を出て行つた。

今日の仮病についてはそれ以上何も言われなかつたので、彼女も
途中から学校に行って注目を浴びるような事態から免れた。

ようやく安心してボードにちょっと田をやると、さつきは気がつかなかつたが薬と一緒にプリンが置かれている。彼女はそろそろと手を伸ばした。

明日の日曜日に、何かお礼を買おう。

駄菓子屋をとことやつあたり

という訳で、彼女は定期券ではなかつたらしい『カード』をぶたさんの財布（小銭入れ）に入れ、お礼できるものを手に入れる為、外に出ていた。

当ても無く家を出た訳ではない。ちゃんと彼女は日星を付けていた。

もしもお金がたくさんあつたら行こうと迷つていたところ そこは昨日の帰り道にもあつた。

期待いつぱいに店内に入ると、きょろきょろとする。

今日は籠を持った。この籠いつぱいに買い物をするのが、彼女の一番田の夢だつた。

それはもう、ざきざきしていた。

教科書を何冊も買える程のお金と引き換えるになるといつのだから、今この彼女には夢も夢ではなかつた。しかし同時に、そのざきざきは半信半疑からも來ていた。

こんなカードでものを買つなんか見たことも聞いたこともない。

商品券だつたら、もつと薄つペラの紙の箒だつた。それにこのHクレアカードとやつは黒くて、なんだか好きになれなかつた。しかし嘘を吐いている風ではなかつたのを思い出し、気を取り直してちよんちよんと籠に品物を乗せていった。まずは、ふ菓子。

次には、風船ガム、五円チョコ、金平糖、後は、後はえーと、食べたことはないけど、コーラのタブレットに、四十円もする宝石グミ、きなこの棒に、よつちやんいか、チロルチョコを全種類と、うまい棒も男の子は好きだ。何味が好きかは分からなければ、全部入れてしまおう……足りるかな、いや足りるはずだ。彼女は今、たくさんのお金を持っている筈なのだ。

彼女の好きなもの、食べたことのないもの、全部全部、籠に入れてとんとレジの台に置いた。おばあちゃんが出てきた。 今までに、彼女の夢が叶う瞬間だつた。

彼女は耳まで真っ赤にして駄菓子屋を出た。何も持っていない。
何も、買えなかつたのだ。

お金をいれる場所に置いたカードを挿んでしばりくおばあちゃんと沈黙が続き、辛抱強く待つたおばあちゃんはよつやく、「お金を持っていないのかい」と聞いた。

嘘吐き。

彼女は泣きそうになつてこくんと頷くと、籠を持って元の場所にお菓子を戻し始めた。

それは夢を莞り取られていつているようだつた。そんな苦痛を自らの手でやり終えると、おばあちゃんに謝つた。おばあちゃんは可哀想に思つたのか、金平糖を一つ彼女の手に握らせてくれた。

くしゃりと皺を作つて、また来ておくれと微笑んでくれた。

彼女は泣くのを我慢して「くんと頷き、お辞儀をした。ありがとうと言つたら、ぼろぼろと泣いてしまいそうだつたのだ。それから彼女は忘れずに籠を置いて、小さなお店を出て行つた。

帰りたくも無い家に帰つた。与えられた部屋に戻つて、カードを投げた。

本当は、捨ててやりたかった。騙されたのだ。そもそも、何でこんな薄っぺらいものでものが買えるなんて信じたのか、頭の足らない自分が恥ずかしかつた。

だけど、結局は机の元の引き出しにしまつた。

もしも捨ててしまつて、例えどんなに理不尽なことだつて何が『反抗的』に取られるかは分からなかつた。

彼女が弄ばれているのは、初めつからなのだ。人を辱めるのが好きなのだ。

その日の夕食、彼女は『婚約者』の顔も見たくなかったし、見られるのも嫌だつた。しかしへ決まりことなので席には着いて、なるべく早く食べてしまおうとお皿だけを見て口を動かした。

このナイフとフォークも嫌だつた。なんでお箸じゃないのか。何でどんぶりじゃないのか。

これまで彼女が受け入れてきた箸の悪意は決してどこかに消えてしまつた訳ではなく、ちくちくと出口の無い暗室でちり積もつていだ。それがちりちりと吹き荒れて、今ここで点火を待つていてだつた。

それは彼女も無意識に恐れていて、何事もなく夕食を終わらせよ

「どうした？夕葉。そんなに急いで食つたら『また』腹が痛くなるつと躍起になつて食べていた。のだが。

「どうした？夕葉。そんなに急いで食つたら『また』腹が痛くなる
ぜ」

これに。

揶揄する口調に、彼女はかちんと来てしまつた。

「…………」

何も答えなかつた。答えなかつたが、しかし脅迫觀念から何か答えなければならなかつた。

「ゆはは『ゆは』ではありますん、『ゆうは』です」

実際、これは前々から気になつていていたことだ。男には『つ』の発音がきちんとなされていないと感じていた。

これは重要なことだつた。

『ゆは』の呼び方は、お父さんが死んでしまつてからは陽ちゃんと自分だけの呼び方だつた。だから自分では呼んでいながらも、他人にはこの一文字を欠落して貰いたくなかった。

「それはすまなかつたな、桂木『ゆうは』。俺も名前の呼び違えには辟易した口だ」

彼女は話半分にしてかちやとフォークを置いた。彼の名前の話などどうだつて良かつた。『ご馳走様でした、と言つて立つと背を向ける。しかし。

「待て」

男も静かにフォークを置いて、テーブルの上に手を組んだ。

「他に言いたいことがあるならいつでもつたがりだが、桂木夕葉」

仮にも夫婦になるんだぜ、と言われてからときたがそれは正論だつた。

「買えませんでした」

彼女は後ろを向いたまま答えた。

「駄菓子屋さんで、やははお菓子を買えなくて、あれはお金の代わりではあつませんでした！」

一瞬止まって、それから突然くつくと聞こえた。どうも笑い上戻りしかつた。

「駄菓子？ そんなもの買える訳ないだろ？」

「ほひ、と何より先に涙が零れた。

そんないじやない。

駄菓子屋さんで、陽ちゃんはお菓子を買ってくれた。小学校が終わると手を繋いでもらつて一緒に帰つて、駄菓子屋さんに寄つた。それから公園に行って陽ちゃんは風船ガムを膨らますことができて、ゆはは音のなる飴を吹いた。夕日が差すまで遊んで、家まで送つてもらつた。一番幸せな時だつた。

『そんな』じゃなかつた。

彼女の大切な想い出が、笑いながら踏みにじられたのだ。

「そんなではありません！」

振り返つて、涙でぼやける黒い姿を睨み付けて彼女は叫んだ。

「大嫌い！」

そうして後はもう、走つて行つた。
シーツに顔を押し付けて、それからもう声なんか気にせずに、気の済むまで泣いた。わんわん泣いて、泣いて、泣き寝入つた。

彼は黙つて二人分のデザート カラメル・ブティングを下げる
せた。

『おやつ』の時間、彼女が最も好んだのがこの洋菓子だった。

金平糖が一つ

次の朝は、早く学校に行かなければならぬと言つて朝食も食べずに逃げるよつて学校へと出た。今は「ここに居るよつては学校の方がましだつた。

そのくせ車で降ろしてもらつた後は校内の雑木林をうろついて、登校に踏み切つたのは比較的ぎりぎりの時間だつた。しかしもつと早くに学校に来ていたら、違和感の連續に迷つた末、引き返してしまつていたかもしけなかつた。というのも、先ず上靴はきちんとあつて何もなつておらず、ロッカーも綺麗なままだつた。逆に怖くなるほどだつた。恐る恐る彼女は教室のドアを引いた。

一瞬、空気が静まつた気がした。だが後は何事も無かつた。席に着く。

「……おはよう、桂木」

隣から、初めて彼の方から挨拶がなされた。

「お、おはよう……」とさうします

彼女はおつかなびつくりで答えた。

そつだ、あの教科書のことを

「ここになつて彼女ははたと気がついた。

あの教科書は？

いいや、あれ、そういうえば今朝はどうして鞄が見つからなかつたのか。一体いつから……あれ、そもそもあの走つて帰つた日は何も持つていなかつた……？まさか、あの教科書を隠し入れた鞄は？

「お前のだろ」

差し出されたそれは、彼女の鞄だつた。しかし、自分の筆記用具、生徒手帳以外、空だつた。あの切り裂かれた教科書は一体どこへいつてしまつたのか。

実は、彼女が逃げ帰つた土曜の朝、あの後このクラスでは一騒動があつたのだ。

霧崎天輔の教科書が切り裂かれて見つかった。

しかも、その教科書は隣の席の女子　桂木夕葉の鞄の中から見つかつた。

大人しげに見えた彼女だけに皆驚嘆したが、確かにそこに入つていた生徒手帳は桂木夕葉の名だつたし、その筆記用具入れが彼女ものだと彼も認めざるを得なかつた。

また桂木夕葉本人は鞄だけ置き忘れて一向に現れなかつた為、その無実を証明できるものはいなかつた。

「酷い」

ひそ、と非難の声が上がつたのを皮切りに、ひそひそと、そして終いには憚る友達もいない彼女への中傷が野火の如くに広がつた。

信じられない

大人しい子に限つて

最近霧崎君に素つ氣無くされていたから

貧相な顔して、勘違い甚だしい

大体なんで自分の教科書を持とうとしなかつたのか

取り入る為に

単に貧乏だつたんじやない

そもそもどこの家の子

「つるせえ」

がたんと彼は席に着いた。自分の教科書を取り出して、造作なく自分の鞄に入れた。

声はせいぜい普段より少し低いくらいで決して通る声ではなかつたが、その瞬間教室は水を打つたように静まった。

「 あいつじや ねえよ」

「ぼや、と呴くのも何故か全員の耳にはつきつと届いた。田鼻耳といつより肌で判つた。

霧崎天輔は、何か許しがたい怒りを感じている。

誰も微動だにできなかつた。声を発するどころか息をするのも苦しい。沈黙の磔刑に課せられていくようだつた。尤も、誰も何に対する怒りなのかまでははつきりとは判らなかつたが。

兎に角もうこの話はこれきりしてはいけない」とははつきと共通に認識された。

「そう言えば、」

女神のような一声。涼やかなよく通る声に教室の空気は僅かに緩んだ。

「今朝桂木さんを見たわ 走っていて、青ざめていたわね。何かに吃驚して逃げたみたいに。 まあ、憶測は無意味だけど」

それから彼女は自分も席に着きながら、前の背中に向けてか続けた。

「霧崎君の持ち物が切り裂かれようと大したことじやないけど、恥知らずな人間がこのクラスにはいなさそうで安心したわ。それにしても、悪意を持つ人間が悪意を差し向けること、隣人が救いの手を差し向けなかつたことのどちらが罪深いかは一考の余地があるわね？ どちらにせよ、負感情を顯わすのは見苦しいわ。人にしろ、自分に対してもしろね」

ねえ、霧崎君？ と締めくくられたが、彼は何も答えなかつた。

そうしてこの騒動には決着がついた。

そして一日置いて月曜日の朝 騒動を露も知らない時の本人桂木夕葉が登校し、さらに決定的な出来事が起こつた。

「朔太郎様よりお忘れ物を預かっております、夕葉お嬢様」

朔太郎 工藤朔太郎。

財界では前提的に、況やこの学園では絶対的に逆らってはいけない名だった。これは一介の子息令嬢なら そうでありたいならどんな阿呆でも判らなければいけないことだつた。それを工藤家人間に對して、どこの家の などと言つた輩は、可哀相に卒倒してしまうのも無理はなかつた。

衝撃的な余韻を残したまま、執事は帰つて行つた。そうして机には一部づつの教科書の山が残されていた。

「あの……」

彼女は隣の席の彼に向かつても「もー」と言つた。

「「めんなさい、 ゆはは霧崎君の教科書を駄目にしてしまつたのですが、それで、」

「もうある

「よかつたな」

彼は自分の手元にある教科書を軽く振つて見せた。そして彼女の教科書群を見て心なし笑つたように見えた。

彼女は、あ……と頬を染めてから、

「今まで、教科書を貸して頂いてありがとうございました」

とペーりお辞儀をした。それから制服のスカートのポケットから

何か取り出し、もじもじとして差し出す。

「どうせ」

彼はセロハンの一つの包みのつか、一つをひょこと摘み上げた。それで彼女の柔らかい手の平には、一粒、虹色の包みの金平糖が乗つかっていた。

こうして、彼と彼女とは『仲直り』することができ、また彼女がうつかり天ちゃんと呼んで慣れてしまつまで、初めと同じくらい時間はからなかつた。

+

「いめんなさい」

彼女は残り一つの金平糖を差し出して言った。

「やはりハッ当たりました」

「……」

彼は何も言わずに、その小さな粒を摘み上げてしばしばと眺めた。

砂糖の塊。

原価にすれば一円程度

「教科書を、有難うございました」

もう用事は終わって背にするが、「この店を、」と呟かれた声に顔だけ少し振り向いた。

「 買い取つたら、お前は喜ぶか」

首を振ると、男もそれ以上何も言わなかつたので彼女もそこを後にしてた。

かきくの御三家

「おはよーい」やれこます、夕葉さん」

「「」せげんよひ、桂木さん」

も「」も」と彼女は返事を返しそびれていた。どういふことだ分からないが、嫌がらせがぴたりと止むとそれだけなくいつの間にかこいつことになっていた。

桂木、霧崎、田下

クラスの、下手をすれば学校の『御三家』に数えられてしまっていた。これは『気にする』人間にとっては一大事だった。

「なんとこい」とだ……」

ロッカーを開け背を向けているのにも関わらず、彼女に向けて次々と会釈される様を見て今村茜は呟いた。

「逸材だとは思っていたが、まさかここまでとは」

「「」」までつていふのは、茜も家柄で人を判断する口なのかしら?」

「いやいやそつは言つけどね?『お嬢様』つていう追加要素はやはり見逃せないよ。我侭系と内氣系のどちらが王道かっていう議論は置いて、個人的に萌えるのは

」

「黙れ。朝からつむせえよ、今村」

机に突つ伏していた霧崎天輔は、騒々しい声に顔を上げ、気だるそうな眼を向けた。何故か隣の席に座っていたが、そこは言つまでも無く桂木夕葉の席だつた。彼女はすぐ傍にまで来かけていたが、誰か人がいるのでロッカーでものを探す振りをして「ごそ」としていた。

「……どけてやれ」

ちらとロッカーの様子を見て言つ。今村茜は素直にそこを立つと、憂げな溜息を吐いた。

「ああ、何で今村なんだろう。か行なんて望まないから、せめてそれより後ろの席だつたら居眠りなんか絶対にしないのに。尤も、違う意味で涎は垂らすかもしぬ。美男美女萌えっ子の完璧な構図に」

「うぜえ」

「茜、全然上手いことは言つてないから。ドヤ顔はやめてね

しかし今村茜は憇りた様子も無い。

今村茜　　彼女こそ例外だつた。今村商事という中小企業の分際で『あの一人』に対等な口をきいている。しかし、彼女はどういう訳か日下葉那の親友だつた。そして早川達也の幼馴染で、彼は霧崎天輔の数少ない友人であった。為、彼女の不羨は比較的眼を瞑られていた。それに、彼女は明るく人好きするタイプだつたのだ。

「霧崎君、自分では蔑んだ眼をしているつもりかもしぬけどそれ逆効果だから。そんなに私を興奮させたいのかな？」

「黙れ変態」

「黙れマザコ」

と涼やかな声で嗜めたのは『美少女』だった。

「何だと？」

睨みつける様子に動じず口下葉那は微笑んで返す。

「あ、自覚あるんだ？」

「お前こそあるのか？腹黒女」

「あるわよ」

「あるのかよ」

やれやれと彼女 第三者になつた今村茜が手を上げてみせる。

「痴話喧嘩は犬も食わないってね」

違えよ、違うわ、と拗つて返事が返ってきた。

桂木夕葉はちらちら田を向けて、自分が席に着ける機会を伺つていった。

早川達也は朝練後の安眠を妨げられることなく、机に顔を突つ伏していた。

「ねえねえ夕葉ちゃん。ねえ夕葉ちゃん」

彼女は、お弁当を食べていた。自分の席で、一人で。

しかし隣から頻りに呼び掛けられて向く。今村茜はその席の椅子を借り、机を挟んで日下葉那と昼食を食べていた。昼休みになると天輔と達也はどこかへ行ってしまう。

「夕葉ちゃんと理事長って、どういづ繋がり?」

「いとこです」

嘘ではない。嘘を吐いたことにには、ならない筈だ。

「ふーん。いとこがあ。いいなあ……」

「茜もいるでしょ、いとこ」

「いや、うちのいとこなんてたかが知れてるつてもんよ。欲しいのはイケメンの親類」

「茜は節操がないわね」

「節操無くは無い。この学院にイケメン率が高いのがいけない。それに、理事長って未だ十代って知つてた?」

「えつ」

と声を出したのは口下葉那で、桂木夕葉は吃驚して声も出ず、自分で作ったたこさんのワインナーをぼろと箸から落としていた。茜は滅多に驚きを見せない親友の反応に満足し、どこからともなくA4のファイルを取り出すとペリ、と捲りそこを読み上げ始めた。

「工藤朔太郎　工藤財閥の御曹司、長男。父は宇宙飛行士、弟は音楽家。幼少期より渡米し、法、経済、政治学などの修士、博士号を取りエリート校を首席で卒業。その後祖父の危篤により急遽帰国。氏の死去、父の不在により事実上工藤財閥の相続者と目されている」

ふつと彼女は目を上げ不敵に微笑んだ。

「い」の経歴で齡十九という若さ。硬派で物憂げなお顔が大人げどうですか?この少女漫画ばかりのチートエリート設定は。これでも

節操が無いこと?」

「やうね アメリカ留学なんて誰でもできるし、ハーバードの卒業生なんて毎年何千人もいて、首席だって毎年必ず誰かしらはなるものよ。ハリウッドにスカウトされるだけだったら星の数だけいるし、御高齢のおじい様が亡くなるのは誰にも避けられないことだわ。家と才と容姿に恵まれた人なんて、結構ぞうぞういるものよ。まあ多少時運がいいっていうのはあるかもね」

あと多少老けていいことも認めるわ、と肩をすくめると、ふう、と茜の方が溜息を吐いた。

「やうべ、社会の上澄みの上澄みの世界ではぞうりにある」とかもね。まさに格差。しかし金持ちには何故高確率でもれなく容姿と能力も付属されるんだろう。能力者が金持ちになり、別嬪さんをお嫁に貰うとこう連鎖構造なのだろうか

「付いてきたんじゃなくて付けるものよ」

「譲つて教養はそもそも、容姿は生まれもったものでしょう」

「容姿だって、身に付けるものなのよ」

「うーん、深いなあ。ねえ、どう思つ? タ葉ちゃん」

とんとんと肩を叩かれたので吃驚した。十九といつのは耳に入っていたが、話はよく聞いていなかつた。

「茜だつて可愛いのに、やうじつ風に見せないでいるのよ。茜のやうこうといじめが好きだけどね」

「あやつ、面白。ありがとうー。そんなことを思つてくれるのは君だけだけどねー」

「そうかしら」

葉那は意味ありげに微笑^{わら}つた。

プロファイル裁判

「何だこれは」

天輔は顔を引き攣らせた。戻ってきて机に置いてあつた青色のファイル 何の変哲もないファイルを、誰の置忘れかと何気なく捲つてみた後の第一声だつた。そして横にちらと田に向ける。止める間もなくははらはらしていた彼女はびくりとした。

「 桂木、知つているか

その声がなんとなく怖かつたので、思わず彼女は首を振つた。茜ちゃん達はトイレに行つたのだ。しかし彼がびりと一ページ田を破り取つたのを見て慌てて止めようとすると。

「それは茜ちゃんのです！」

「そうか 今村のか」

彼の声は低くなつて、彼女は泣きそつになつてきた。告げ口のつもりじゃなかつたのに。早く戻つてきて その時。

「あーーーっ！」

戻つてきた。天輔が手にしている青いファイルを見るや絶叫し、走つてきて奪い取る。

「み、みみみ見てないよね？」
「一ページ目以外はな」

「一体何の権限があつて、人の私物を破つたりしているのかしら？」
「うなだれた犯人のようにがつくりと項垂れた。

「一体何の権限があつて、人の私物を破つたりしているのかしら？」
「霧崎君」

後から歩いてきた日下葉那と霧崎天輔が見合ひ。クラスの注目は浴びていたが、別段騒ぎ立てもせず何か見世物でも始まつたような雰囲気だつた。割といつものことらしい。

「てめえに言えた台詞か？」「何のことかしら」

彼はち、と舌打つともう席に腰を下ろした。一人の間に立ち挟まれていた桂木夕葉は心の底からほつとした。しかし日下葉那は親友への非礼を許さなかつた。柔軟な微笑みを消し切れ長の瞳は冷たい。

「何様のつもり？ 茜に謝りなさいよ」「い、いいくて葉ちゃん……そりや、写真の一枚でも追加できたら嬉しいけど。できればコスプレして」

後半をちらり、と期待した目で伺われて、彼は思い切り睨んだ。

「ふざけるなよ」「はい、すみませんでした」

自分を挟んで行われるやりとりを彼女 桂木夕葉は概ね理解していた。そのファイルは茜が「イケメン プロファイル」と呼んでいるもので、『特別に』自分にも見せてもらえたものだつた。それには男の人の写真が貼られ、下に名前が書かれていて、他に身長や

体重（推定も含まれる）が載つていて、その情報量は人によつて異なるが経歴や趣味、さらには時間別目撃分布図まで書かれているものまであった。

霧崎天輔の名前はその一ページ目に載つていて、正確には分からぬが、その情報量も他に比べて多い気がした。彼女もそのページには比較的興味を持つて読んでみると、彼の父親が外交官で母親はフランス人であること、中等部までは剣道部に所属していて個人部で全国三連覇を果たしていたこと、などが分つた。

よつて彼女も共犯だった。彼が望まないやり方で彼を知つてしまつたのだ。

しかし彼女には名乗りを上げるだけの勇気は無かつた。それで茜には悪いと思いながらも、彼に関する事項が実は一ページ目だけではなく他にも結構に及ぶ写真ページが存在することは黙つておこうと誓つた。

しかし。

「その言い方だと他にもありそうだな。貸せ」

「ええ、いや、待つて、これだけは！身長体重経歴その他は記憶しているけどネガは持つていないのでこれだけは！」

「気持ち悪いんだよ、捨てる！」

彼がまさに取り上げよつとした時、しかし前に立つたある一人によつてそれは阻まれた。

「さりとファイルが落ちる。そこに立つていたのは日下葉那ではない。

「達也？」

「その言い方はないだろ、天輔」

「全く信じられない横暴さね」

彼の方でも信じられなかつた。自分が悪いのか？

自然と、『彼女』の方へ視線が向いた。一部始終を見ていた、公平な裁判者を。

自分に視線が集中した小法廷で、彼女はおずおずと答える。

「 大切にしているもの取るのは……」

愕然としたが、まだ言い分はあつた。

偶然か高確率か該当ページが証拠然と開いている。ほとんどが彼の視線が向いていない、身に覚えのないものだつた。

「 盗み撮りしたものでも？」

「 盗み撮りじゃないわ」

すぐ様それは否定された。ネガは持つていなつて言つたわよね？と勝ち誇つた微笑で指摘されてから、

「 体育祭、修学旅行、全国大会、授与式……全部、学院が行事の記録にカメラマンを雇つて写真を希望者に売り出していたもの（競り落としたもの含む）よ」

三人が彼を向き、一步出た弁護人が余韻たっぷりに告げる。

「あなたがこの修学院高校に所属している以上、何の違法でもないわね？」

彼は敗北した。

その午後中、天輔はむすりとしていた。

夕葉は結果的に茜側に味方してしまったこと、いつも彼が（彼女からすると）自分の味方をしていてくれたことを考えて非常に申し訳なく、居づらかった。話しかけるのを控えて小さくなっていた。しかしそのまま七限目が終わり、放課後の鐘が鳴り、彼が達也を待たずして教室を出ようとするのを見るともう耐えられなくなつてぎゅっと彼の袖を掴んだ。

「何だ？」

彼は訊いたが、彼女はなんと言つたらいいか考えている最中だった。

「俺、部活行くから」

「待つてます」

は？と怪訝に見やるとなんだか必死な様子で見上げてくるので少し笑つてしまつた。

「暗くならないうちに帰れよ」

天輔は軽く振り払い教室を出て行つた。

彼は桂木夕葉の案外な頑なさを未だよく知つていなかつた。

果たして夕葉は待っていた。

グラウンドを、石の階段に座つて眺めていた。

お迎えに来た人達には、きちんと断つた。自分で帰れると言つと、帰る時には連絡をして欲しいと携帯電話を渡されたが、強引には連れて帰らなかつた。の人たちは悪くないのだ。

夕暮れ時になる。朱色であたたかい、気持ちのいい光。グラウンドには色んな掛け声が色んな方向から聞こえる。みんな、頑張つている。

矢ちゃんを見つけた。

陽ちゃんよりずっと下手だ。

皆の方には混じらずに、一人でドリブルをしている。
多分、まだ混ぜてもられないんだろう。

それなのに、彼女は直感的に分つていた。

陽ちゃん、今はどうしているかな。早く、早く脚を治して練習に戻つて。

誰にも負けないで、陽ちゃん。

打ち負かしてやるなんて言つたのは、嘘や大げさにはならないことを直觀していたのだ。

まだまだ ずっとまだまだだけど、あのドリブルは昔の陽ちゃん重なる……

それも、彼女がずっと見てきた彼の成長を早送りで見ていよいよに……

汗。

夕日に光つて散る汗を見て、ぎゅっと手を握つた。

いつの間にか、真っ暗になつていた。

星も出ていた。

ナイターの光の下、漸く選手達が集合した。そして先生の話を聞いて、礼をして、解散した。整列がばらばらと散る中、彼と目が合つた気がしたがすぐにふいと視線は外された。

それからだんだん大きくなつて、彼女の横を汗をかいだ部員達が通つていく。

皆、大抵彼女の方を訝しげに見ていった。ちょこんと、中等部のようでそうでないと分つて、なんだろうといつ感じで過ぎていつた。

『追つかけ』と分つたらグラウンドを締め出されるのだが、どうも彼女にその雰囲気はなかつたのだ。

あれ、と思ったが、そして彼はいなくなつていた。

一応、見ていたつもりだつたのだが通りかかつたら声を掛けてくれるだろうと思って油断していたのだ。ごたごたしていたのでもしかしたら彼も立ち止まれなかつたのかもしれない。

彼女は困つてしまつた。

グラウンドにはいないので、皆と同じようにあの建物（部室）の中にもう入つてしまつたのだろうと思えた。

それで、夕葉はとたと急ぎ足に明かりが漏れる建物に向かつていつた。

それは勿論、知らない人がいっぱいいるところへ向かうのは彼女の想定外だつたが、グラウンドはなんだか急にしんとしてしまつてそこに一人でいるのは怖かつたのだ。

それに、彼に気づいてもらえばあとはいよつとしてくれる筈だつた。

ぱたんとドアを開けた。

そしたらいきなり部屋になっていた。

ずらりとロッカーが並び、半裸の男の子達が着替えをしていた。

汗くさかった。鼻がづんとする。

手前の方では、何か時間が止まったようじっとしてこちらを見ていた。吃驚した。

何で皆こっちを見ているのだろう、と思いながらくぐりくぐりと田で天ちゃんを探す。

「な……」

誰かが何か声が詰まって、それからがたいのいい男の人が前に現れ視界を塞いでいった。

それは実際には一二秒のあつという間のことだったのだが、彼女にはゆっくりだった。摘み出される前に摘み出そうとする動きが視えていたが、如何せんそれに対応できる筋力が彼女には無かつたので、あっさりと摘み出されてしまった。

思わず顔を見合わせて、達也と天輔はぎくしゃくしている場合ではないとの無言の一致を得た。

夕葉とキャプテンとサッカー問答

着替えも半端に急いで一人が部室を出ると、半べその夕葉と、彼らのキャプテンが少し困った様子でいた。迷子とおまわりさんのような感じで口元が変に引き攣りかけたが、ここでは先輩後輩の上下が為されていたので彼らは表情筋を正して駆け寄った。

彼女はぱつと顔を輝かせた。

「天ちゃ むぐ

忽ち口を塞がれる。何故か知らん。

「知り合いか？」

「自分達のクラスメイトです」

背筋を伸ばして起立し、これは達也が答えた。

「サッカーを見るのが好きなんだよな？」

天輔に口を塞がれながら訊かれたが、これは本当だったのとくふんと頷いた。

「ほお

キャプテンは自分の顎を摘みちょっと面白そうな顔をした。彼は本当にサッカーが好きだったので、それに理解を示されるのは気分が良かつたのだ。それも、サッカーのルールすら露も知らなさそうなこの小さな（彼にはせいぜい中学一年生くらいに見えた）少女に。

「それで、ずっと見ていたんだな

キャプテンも気づいていたので、すぐに信じた。それ以上には全く期待していなかつたが、試しに聞いてみる。

「どうだった？」

仕方なしに天輔は塞いでいた手を離し自分も起立した。そして彼も少し、しかし先輩よりはその答えに興味を持つた。

一応、日比谷陽介という高校サッカー界の新星を間近で見てきたのだ。目は肥えていた。本人が意識はしていなくとも。そしてこの学院には、推薦で集まつた優秀な人材が一学年一チーム作れる程に豊富で、勿論設備も充実していた。誰だって、キャプテンの期待通りの驚きと敬意を見せるはずだった。彼女は、んと少し迷つてから答えた。

「あまりつまくいっていません」

冷えた汗が背筋を垂れた。達也も天輔も。

「ほお……どこがうまくいっていない？」

思つたとおり、キャプテンの機嫌には水を差していた。忽然に一オクターブも声が低い。

「桂木、時間は大丈夫か？」

「もう迎えが来てるよな？」

なんとかそう言った。先輩の手前口を挟むのは気が引けて、これが彼らにできる精一杯の処方だった。しかしキャプテンの方ではそのまま帰す訳にはいかなかつた。自分のチームに全情熱を傾けていたのだ。彼らサッカーがよく分つていらない人間にでも、適当に非難されてそのままにはできない。

しかし彼女は正直だった。

「髪のくるくるの人と鼻が変な人の間で道が切れています。ボールを止める人は前と後を考えていません。攻撃はみんな攻撃です。茶色い人は　　ん」

また彼女は口を止められてしまった。今度は達也の手で。しかし何故かさらにその手は天輔に外された。

「喋つているだろつ」

「　　鼻がむずむずします。点々で、ぐにゃぐにゃです」

と言つて、彼女はしまいにくしゃみをした。

キャプテンは、呆気に取られていた。

何故かと言うと一笑に付すには脳みそのどこかを痒く引き止められて、考え考えて謎謎を解くように色々と当てはめてみた。そして、遂にぴいんと来た。

「ほお……ほおほお」

興味深気に彼女を見る。

言葉は幼いが、「一チの言つている事と通じるものがあつた。それも、たつた一日の練習を見ただけで。

それで今度は真面目な顔になつて尋ねた。

「 一つだけ直せるなら、何を直す？」

「 よりちやんがいません」

即答だった。しかしながらよく分らなかつた。

「 日比谷陽介です。彼女は幼馴染だつたそうです」

と、達也が補足する。それでキャプテンは不思議な少女に何かの命点がいつたようだつた。だが同時に笑い出してしまひ。

「 日比谷陽介…… 日比谷陽介か。確かに、あれが欲しくないチームはいないうだろ。だがな、そういうことじやないんだ。万が一にでもあれを引っこ抜けても、そういうことじやないんだ。このチームなんだからな」

「 こいつが言いたいのは、」

黙つて聴いていた天輔が口を開く。

「 軸がいないうことだと思います」

キャプテンは彼を見た。生意氣だと思つた。この一年坊はサッカーはやり始めたばかりだつた。

何かの武道では成功したらしいが、そもそもスポーツの『乗り換え』が理解できなかつたし、こついう何にでも成功できると思つているような万能タイプが彼は好きではなかつた。サッカーをする資格は『そういうこと』じやない。ちやほやされなければすぐに辞めるだろ。と、春練に来ていたときからずっと、彼には一度もフイールドを踏ませずにいた。

「けれど、たぶん、」と彼女は続けた。

「よつちやんがいます」

これは達也もよく分らなかつたので補足できなかつたが、天輔の方はちらと彼女と目が合つた。

折角だったが、彼女が意気揚々と案内してあげた駄菓子屋はもう閉まっていた。

このお店は彼女の秘密の場所で、あの時以来ちょくちょくと行つては賞味期限の切れたもの（つまり相当に古い）を貰つていたりしたのだ。

彼にはここが素敵な場所だと分かるはずだった。あんな風に、馬鹿にしたりなんかはしない。

彼女はなんとしてでも今日彼を慰めなければならなかつたので、シャッターが閉められていても諦めなかつた。

「おばあちゃん、おばあちゃん」

とんとんと戸を叩いた。

天輔は驚いた。突然裏手に駆けて行つて、呼び始めたのだ。どうやらここは彼女の祖母宅らしい。

『おばあちゃん』は出てきた。割烹着を着て手を拭きながら出てきた。奥から焼き込みごはんのよつないい香りがして、彼女はくんくんと鼻を鳴らしていた。

「おばあちゃん、お店を開けてください」「はいはい

と祖母らしき人はここにこじて中に入つていた。彼女は天輔の手を引いて行つて、シャッターの前で待つた。すぐに彼はその手を離したが。

そしてがた、がたがたとつま先の方で言つので、彼は腰を屈めて
そのシャツターを外から押し上げてやつた。

「あらあら、ありがとうね」

彼女は自分が連れて来た親切な男の子を誇らしげにしていた。

「今日はもう来ないと思ったよ」

『おばあちゃん』はむしろ彼女に手を引かれながら店へ引っ込んでいった。突つ立つていても何なので彼もその後に続いた。

「へえ……」

興味深そうに天輔が辺りを見回していると彼女はかなり得意げにした。

「夕葉ちゃんのお友達かい？」

この店主も興味深そうに彼を見る。夕葉はどぎまぎして問われた彼を見ていた。

「ん……まあ」

そう言つた瞬間に彼女は顔を綻ばせ、あまりに嬉しかったので恥ずかしくなつて下を向いた。顔が満面の笑みになるのを止められなかつたのだ。

もしかしたらと思っていた。だけど、本当に、本当に

彼は彼女の初めての友達だった。

「送つていいく」

駄菓子がたくさん詰められた茶色の紙袋を持つて、天輔は言った。彼は人からの貰い物を無碍に断る名人（毎年ある時期に鍛えられた）だったが、この場合は桂木夕葉が勝利していた。

彼女はそれが彼に贈呈されるのを見るや否や、祖母に笑顔で抱きついて『ありがとう、おばあちゃん』と言つたのだ。ずっと欲しかった玩具を買つてもらつた子供よりも嬉しそうだつた。きっとひどくそうしてほしくて、しかも期待以上だつたのだろう。

丁重な断り文句を言いかけた彼は、それを見て流石に返すのはよした。

それにしても彼女は今まで見た事がないほどはしゃいでいた。

今まで、と言つても数週間程で何を知つていた氣でもなかつたが、それにしても、という感じだつた。学校にいる彼女は彼女の本當ではないのかもしれない。今ここにはいつも何かに怯えたようなびくびくした姿は無く、感情豊かで人懐っこい少女がいた。

そうして夜道を歩いて暫く経つと、上藤家の塀が見えてきた。なんとなく、この辺でいいかなと彼は思った。

沿つて歩いていけば迷うことはないだろうし、警備もしつかりしているだろう。

それに、余り接触しない方が無難だ。

元々霧崎家は貴族だとかの末裔で、代々新興財閥とは馬が合わないどこかで聞いた。要するに、きっと家柄を鼻に掛けているので新興系の『成金』には煙たがられているのだろう。しかし霧？の家は歴史的に培ってきたという各界への繋がりがあるので無碍にはできないし、霧？の方でも無視は得策ではなく、表面的には仲を保っているのだ。

まあ、どうでもいい。

「じゃあ

と特に予告なく立ち止まつた。遅れて、数歩先に進んだ夕葉が止まって振り返る。

彼女が口を開きかけた時

「夕葉！」

背後から突如男が現れた。声にびくりと背を震わせる。天輔も急に現れた男に多少驚いた。黒いジャケット姿だった為に暗闇に紛れていたのだろう。

「お前、こんな遅くまで何をしていた！」

父親か。いや違った、理事だった。

今日のあのふざけたファイルの破り取つたページの次に見た気がする。興味も無かつたから不確かだが。彼女は「いつも」彼女に戻っていた。おどおどして目を行つたり来たりさせている。むしろその落ち着かなさは段違いに酷かつた。

泣き出しそうにしていて絶対に要領を得なさそうな彼女を放つて男は自分をじっと睨み付けた。

「 霧崎の人間だな？」

だからなんだ、と流石に彼も理事長に対して喧嘩を売るような口を聞きはしなかつた。

「教科書を貸して貰つたそうだな 今日のところは不問にしてやる」

この偉そうな態度。決定的に彼はこの理事とは相容れない存在だと悟つた。あいつを彷彿とさせる

「行け」

言われなくとも、と背を向けた。初対面の人間にここまで嫌悪感を覚えるのもおかしいかもしれないが、桂木夕葉とは反対の意味で昔から知つていたような感覚を受けていた。

それにしてお。

少し違和感も感じた気がした。彼はそれ以上は考えはしなかつたが、無意識ではその正体を隠にも捉えていただろう。そうでなければ、可哀想な『友達』をそのまま置き去りはしなかつたに違いない。

彼が考える程の横柄な人間ならば、人を怒鳴りつけるのは椅子に座つてするもので、わざわざ自分で出向く必要はない筈なのだ。

ぱん、と張られた頬を押さえる。
涙を零すより先に、唇を噛んだ。

何で

彼女をぶつていいのはお母さんだけだった。
知らない人がぶつのはいけないことだ。

陽ちゃんだつたらきつと怒る。

陽ちゃん

ここで彼女はじわ、ときた。……そうだ。彼女は、もう彼のもの
だった。彼女をどう扱うかの権限は、彼が買い取っていたのだった。

「ごめんなさい……」

はつとして、彼は手を押された。

「つ……」

何か言いいかけて言わず、黙った。もしかしたら何か微かに言つ
たかもしぬなかつたが、彼女は俯いていたので唇が僅かに動いたこ
とも知らなかつた。

「遅くなるなら、」

それからまた黙り込み、ち、と舌打をするといつもの鋭い眼で彼
女を見下ろした。

「門限は六時だ。遅刻は認めない。帰りは必ず車で帰れ。

以上

きつぱりと事務的な口調に戻つて、行け、と言われて彼女ははいと返事をし退室した。

扉が閉まつた後の男の溜息は誰にも聞こえなかつた。

雨天の昼休み

「6時　　…？」

今村茜は吃驚してみせた。

昼休みだった。

教室の人口密度が若干高いのは五月雨が屋上庭園その他の屋外弁当スポーツを濡らしているからだろう。今村茜や田下葉那といった日に教室を出ない人間に取つてはあまり関係がないことだったが。ちなみに桂木夕葉も別段当てもなかつたので教室に居残つている人間だった。

「ぞいりよ」

田下葉那はせりつと髪をかき上げて言つた。

「またまたあ。だつて高校生だよ？女子高生。帰りのアイスは？この七八限まである鬼畜学院から解放された後、どこでどう遊ぶの？」

「あんまり遊ばないんじやないかしら。ゲーセンとかでは」

「そうね。ごめんね。悪い遊びを教えて。田下葉那にゲーセンなん

て俗な言葉を吐かせて」

「その拘束が嫌で部活に入つた、といつのも一つにはあるわ」

「うーん。愛されているんだね、うちなんて門限のもの字もないもん。心配どこいった」

「確かに心配されてるわ。忙しいのに誘拐でもされて煩わしいことになつたら、てね」

「うん、いやそんなことはない、と言つてから話を前の席の少女に振つた。

「ゆはりんは何時？門限」

「六時です」

しつかりと会話を聞いていたのがばれていたのではないかと内心焦りながら答える。

「はつああ……そういうもんのかね、令嬢つていうのは」

「ゆはは昨日からです」

「ふーん……」

何故かくすりと日下葉那は笑った。

「昨日、霧崎君に何かされたの？」

「はあつ！？」

と勢いよく振り返ったのはその人本人だった。彼も雨天の為に教室で昼飯を食べていた。

今村茜は日下葉那の隣の席に座り、早川達也は霧崎天輔の前の席に座っていた。そして彼女は自分の席 それらの丁度真ん中の位置に座っている。時々前からも後からも話しかけて貰えるので、なんだか囲まれて、一人でご飯を食べているのではない気がして彼女は少し雨を喜んでいた。今日という日はこれで満足だった。

「勝手に人の話を聞かないでくれないかしら？霧崎君」

「勝手なこと言つてんじやねえよ、日下」

「だつて、」

「凄まれたところで物怖じもせずに葉那は言った。

「達也君が言ってたわよ？ 昨日霧崎君が桂木さんを送つていった、て。それでその後中々帰つて来なかつたとか」「何で俺の帰宅時間が分かるんだよ」

これには前の席で置いてけぼりだつた達也が答えた。

「お前んちのお袋さんから電話が来たんだよ。帰りが遅いけど何か知らないか、て」

彼は深い溜息を吐いてもう前を向きかけた。が、

「はい！ 何で夕葉ちゃんを送つていったのか凄く気になるんですが！」

と茜が手を挙げて言った。

「面倒くせえ」

と彼はそのまま前を向いてしまつた。

「うー……なんだよ、なんだよ、私もゆはゆはをお送り申し上げたかつた……決して不埒な考え方ではなく」

「そつちっ？」ときちんと葉那がつっこんだ。

「霧崎君」

と彼が教師に呼ばれたのは話題が終わりそつだつたそんなタイミングだった。

「理事長に呼ばれているから行つて来なさい」

「え！」

と一番の反応を見せたのは霧崎天輔でも桂木葉那でもなく、今村茜だった。

「先生、それ私が代わりに行つてもいいですか！？」

「じゃ、霧崎君。早めに頼むよ」

そう言つて教師はそそくわと出て行つた。

「あれスルー。完全スルー。何で？」

「『不埒な考え』が顔に出てるからじゃない？」

「何で？ 尊敬する理事長先生を間近で拝見したいと思うのがそんなにいけないこと？ 愛学精神でしょ？」

「つてか理事長つて学校に来てたんだな。始業式の初つ端から『お飾り』発言してたのに」

「寄つた、て感じね。見ない車を見たもの」

外野が喋つているのを他所に天輔はくしゃと牛乳パックを潰して席を立つた。

「あら、行くの？」

「ああいう奴は、自分の思い通りにさせないと余計面倒事を仕向けてくるんだよ」

くす、と葉那は笑つた。

「全然違つわ　　あの人とは」

彼は何も言わず教室を出て行つた。

「　わて」

今村茜は時計をちらりと見た。昼休み終了まで残り5分程

「ちよつとトイレにいもつてくるので、授業に遅れても悪しからず

そう言つて彼女も教室を出て行つた。

微妙な間柄で縦一列になつてしまつともう会話は生まれず、残された者達は雨音を聞きながら思い思いに残りの休憩を過ごすことになつた。

婚約者のお迎え

さあさああという雨音がその理事室の静寂を際立たせていた。そこには一人の男以外誰もいない。睨み合ひように対峙する彼らは、その瞳孔に互いを映したまま決して外そつとはしなかった。

張り詰めた空気を切り裂くように、遂に一人が口を開く。

「 なんの用だよ」

「 分かっているだろ？ 霧崎天輔」

自分を睨み上げてくる生徒を真っ直ぐに見返し、未だ若い理事長はくすりと口端を上げた。そして余韻たっぷりに告げる

『 生意気な生徒には教育的指導が必要だからな 』

『 なつ……お前 』

「 何一人でぶつぶつ言つてんの、茜？」

「 うわあえつ」

鍵穴を覗き込んでいた今村茜は、背後の冷ややかな声に飛び上がった。

「 はつきりさせてほしいんだけど」

と田下葉那は幾分呆れた様子で親友を見やる。

「 一体どこからが茜のモノローグ？ 該当部分の始まりと終わりの10字を抜き出しなさい」

「『わあれあとこつ兩音が』から、『なつ……お前』までです」

「全部ね」

「だつて、聞こえないんだもん！それに美青年が向き合つたのは事実だもん！妄想するでしょ、そりや！」

「もん、じゃないでしょ。行くわよ、ほい」

「やだあ。まだ見たいー。心のフィルターへの現像完了まで推定あと一十分」

腕を掴まれ引かれられるよつてアを離れた時、一度それは開いた。

駄々つ子が引きずられていくよつな構図を見て取り天輔はまだ軽い方の溜息を吐いた。

「何をしているんだ、お前は」「あ、お前呼びてなんかいい」

煩わしそうな田で見やつて彼は越していく。その背を見て茜はきちんと自分の足で立つと友人に田配せした。

「ねえ葉ちゃん、さつきの独り言（及び妄想）は霧崎くんに内緒にしてね」「言いたくも無いわ

そのころ、桂木夕葉はまじまじしながら頼まれた言付けを伝えていたが、「トイレにこもつて」という事由は田下葉那においては全く信じられず、従つて今村茜も嘘とこつことになつてしまい、可哀想に、まるで彼女がそういう理由を告白したかのような恥ずかしい田に合ひに終わつていた。

「で。結局何の用だつたんだ？」

早川達也が訊いてきたが、隣背後が耳を澄ましていたのははつきりと感じていたので天輔あつさりと「別に」と答えた。

「期待するのはいけないと思つんだけど、

涼やかな声が背後から問いかける。

「もしかして退学を申し渡されたのかしら？..」

「期待させて悪かつたな」と彼はふきらぼうに答えた。

話す気は無さうだった。しかしあ隣さんの夕葉は問い合わせることもせず大人しくしていた。自分には後でこつそりと教えてくれるだろうと彼女は思っていたのだ。

+

ぱさん、と夕葉は紺色の折りたたみ傘を差した。

大きかつた。

それは男物で、友達の天ちゃんが貸してくれたのだ。

一本あるらしい。

校門までの距離だつたが（と言つても歩いて十五分はかかった）貸してもらうことにした。彼女は友達と一緒に学校から帰つてみたかつたが、彼は部活（室内で筋トレ）があるといつのだ。

土曜日は早くに授業が終わるので待っていても六時前に帰れそうだったが、昨日の今日なので大人しく帰ることにした。お迎えの人にもあまり迷惑はかけたくない。

はたからみると傘が歩いている程に隠れながら、桂木夕葉は門に向かつた。

しかし待っていたのはお迎えの人ではなかった。

「乗れ」

彼女の婚約者　　という名の絶対君主だった。

嗚呼、顔は隠れていた筈なのに！

「乗れ」

男は灰色の眼をちらりと流して言った。

右手のドアが開く。抗いようはなく、夕葉は男の視線を避けながらもおずおずと乗り込んだ。それも後部座席ではなく助手席のドアを開けられたので、彼と並んで座ることになってしまった。

すぐ隣にいる。それだけで変な汗がじわりと浮かんできた。こんなにも逃げようのない空間で一人きりになつたのは初めてだった。ギアががちゃがちゃ言つ度に、夕葉は心臓を跳ねさせていた。

一体何の用事があつて学校に来たりなんかしたのだろう。それが昼の友達への呼び出しに関係がありそうで彼女は訊いてみたかったが、勿論彼女に話しかけられる勇氣などなかつた。

「学校はどうだ」

「きちんと行つています、朔太郎様」

それだけで沈黙してしまつて、後はもう雨中を走る車の音に耳を澄ましていた。

キツ

キーという雨のブレーキ音を聞いていた。車が止まる。しかし窓を見ても、そこは彼の家ではなかつた。

だけどぱたんとドアが開く。彼はいつの間にか外から回つて彼女のドアを開けていた。出るということなのだろう。仕方なくよいしょとお尻を上げた。手が差し出されていたが、勿論そんなことをし

てもらわなくとも彼女は車を降りることができる年齢なので、わざわざ彼の手を患わせることなく路上に下りた。

連れて来られたのは、服のお店だった。

ステッスの人たちに囲まれて何か次々と服を持つて来られたが、彼女は上の空だったのであまりよくは覚えていない。上の空と言うか、何か他人の目で見ているようだった。これが『自分』の日常だとは思えていなかつた。

ぶんぶんという都会の大きな車道、そよそよともしない並木達、かつかつ歩くヒールの人達、金字のアルファベットで書かれた店がすらりと並んだ冷たい通り。

覆つてしまつて、コンクリートで、メッキで、雑踏で。群がる人達に何か着せられ何か脱がされて、よみやく試着室から出られた。

ぽけつとしていたが、男が黒革のお金受けにあのカードを置くのを見た。ちょっと氣味が良かつた。彼は本当に知らなかつたようだが、あれではお金の代わりにはならないのだ。

しかしそれは少しも眉を顰められることもなく自然に受け取られた。それを持つて行かれて、間もなくまた戻ってきて返されてサインをすると男はそれを財布にしまつた。そうして買い物ができてしまつたのだ。

何で自分だけ。

買えなかつたのか、彼女は理不尽な気持ちに襲われていた。多分、彼がそう仕組んでいるのだ。

それは一度繰り返されて（隣の隣の隣、次は宝石店に行つた）漸

く彼女は車に戻された。

やつぱり天ちゃんの帰りを待つていれば良かった。

貴婦人の服たち、マーメイドの飾りたち。

それらは彼女の為のものではなかつた。どうでしょ、と訊かれるのは自分でなく決まって男で、彼女はただのマネキンだつた。自分はそうだと知つてゐるけどもどうしてこの人たちまでが知つてゐるのだろう。いいや、みんなが初めから知つていた。彼女の意見に意味があると思つてゐるのはいつだつて陽ちゃんだけだつたのだ。

も一度ぱたんと閉まつたドアの中で、男が訊いた。

「どこか行きたい所はあるか？」
「いえ」

そして家に着いた。彼の家。

部屋に帰る前に、男が腕時計をちらと見る。

「着替えて待つていろ」

一体何に着替えるのか分からぬが、部屋に戻るとテーブルの上に白い箱が何個か置かれてあつた。開けると、ドレス。靴。バッグ。突然のプレゼントの雨霰に遇い彼女が感じたのはしかし喜びではなく、ただ得も知れない不安だつた。

「お腹が痛いです」

彼女は言いつけどおりそれらにすっかり着替え終えていたのだが、しかしお手伝いさんが一褒めし、彼女の婚約者を呼びに出ようとしたところで咄嗟に訴え出た。

「ゆはは、寝ていないとけないと私は……朔太郎様に、伝え
てください」

無論仮病だつた。しかしお腹を押さえてその振りをするとなんだ
か本当にお腹が痛くなってきた気がした。

無意識に拒否していたのだ。「何か」起こつてしまつことを。

ただ夕飯を一緒にするのにドレスに着替える必要があるだらうか。
多分、またどこかに連れて行かれるのだ。それだけでも息が詰まる
思いがするのに、もし……

「婚約者」という割りに彼は特に何もそれらしい振る舞いはして
こなかつた。無関心という訳ではなかつたが、それは霧崎天輔が感
じたように一見してただの保護者だつた。そしてそれは彼女にとつ
ては不幸中の幸いだつた。

だがもしも、彼が気まぐれに「その気」になつても彼女は文句を
言える立場ではなかつた。自分を売り払つてしまつたのだから。

約束といつ意味において、彼に悪いといひは一つもなかつた。

十分にそれを守つていたのだ。「治す」といつことは初めの手術だけで終わることではなく、日比谷陽介はそのままアメリカでリハビリを受けていた。それもプロのスポーツ選手が受けるような最高水準の環境で。栄養管理、トレーナー、精神面、他全て最高の人事が尽くされていた。彼女が思つてはいる自分の代価三千万など初期費用に過ぎなかつた。

そこまでは知らなかつたが、彼女には契約者として受けるべき定期的な経過報告がきちんと為され、その順調に喜び、また彼の律儀なまでに徹底した手腕を認めざるを得なかつた。

しかもその厚遇は彼個人の日比谷陽介への同情や投資に依るものではなくただ契約の遂行であることも分かつてはいたので、彼女の方でも感情に関わらず「契約」は履行しなければならないと知らしめることになつた。

それでも彼女は逃げることにした。

いづれはきちんと受け入れるつもりでも、まだ彼を恋人として見るには時間が浅すぎたのだ。

躊躇う素振りのお手伝いさんを置いてベットの中に潜り込んだ。ドアの鍵は彼女に管理できるものではない。外から掛けるもので手伝いさんが夜に見回りにきた時に戸締りをした。そのかちやりといつ音を聞く度に、毎晩毎晩彼女は捉われの身を自覚するのだった。

「夕葉、」

しかし彼は来てしまった。こもろと膨らんだ布団を見、椅子を引いてきて傍に座る。
やはり彼女はそのまま隠れているのは「契約違反」に当たる気がして、半身を起こした。

「腹が痛いのか？」

案外に彼は怒ってはいはず、心配そうな声音だつた。彼女は自分の罪に苛まれながらもお腹に手を当てるくんと頷いた。その申し訳なさげな様子が真実味を与えていた。

「薬を飲め

そう言って彼はお手伝いさんを置いてくれた薬をよこす。それはきちんと処方された苦い粉薬で、彼女の苦手とするものだつたがその拒絕はできなかつた。開封された薬と口シップの水を受け取る。うつ、と表情を歪ませながらも上を向き、えい、と粉薬を口に空けた。

「 仮病なら飲まなくていい

ぶは、と喉に詰まつて吐き出した。げほげほする。げほげほ。微妙な表情をした彼に背中をさすられ落ち着くと、水を飲んで口をゆすいだ。

「仮病ではありません」

嘘を吐くと、そつか、悪かつたな、と言つ。だがもう薬を飲めとは言われなかつたので自ら予備の薬（見越したよつて準備がいい）に手を伸ばはしなかつた。

「すまないが明日は空けられない

別にすまぬくない。申し訳なささうに言われても、そもそも空けてくれと頼んだ覚えは無い。それに明日の日曜は彼女にも予定がつた（駄菓子屋に行く）。それなのにそんなことは無視の前提だつた。

彼は彼女をベットに座らせた。どきりとした。風邪だつて言つてるので。違つた、お腹が痛いつて言つてるので。仮病は見透かされているのだろうか。

次には何をされるだらうといつ不安めいた顔でいると、次には驚くべきことを曰いてした。

彼が跪き、手を取つてその甲に

キスをしたのだ。

「結婚してくれ」

する、と指輪が嵌められた。薬指。
……彼女の思考は停止していた。

プロポーズ

それは形だけの。

ここまで律儀だとは。

これもまた、籍を入れるだけが「契約」の範疇ではないらしかった。

彼女は甘く考えていた事を知り、えも言えない恐怖に囚われた。
確かに言った。『誠実な結婚』 だが彼がそう努めても、彼女には悪い人に対してそうできる自信がなかつた。

当然「はい」と答えるべきなのだったが、彼女の思考は都合よく停止したままだった。

その間にも彼は立ち上がり、何やら箱を開けるときりきりと纖細な細工が施されたものを取り出す。プラチナとダイヤのティアラそれを彼女の頭に戴冠した。

ふちん、とこめかみが刺激されて、はつと彼女は意識を取り戻した。

それは彼女の髪に差されていた花のピンで、冠とは不釣合いだったのでは彼は何気なくそれを外したのだった。しかしそれは彼が思うより遙かに大切なピンだった。「他人」が外してはいけなかつたのだ。

ずつとずつと、『あの時』から片時も外さず付けている、大切な
陽ちゃんから告白を受けたときに貰つたピンだった。

「返してくださいーー！」

彼女の返事はこれだった。

「返して……返して、くださいーー！」

ふるふると震えて手を伸ばした。ピンしか見えていなかつた。
陽ちゃんのピン。自分の全て。これがあるから全てに耐えられた。

「返してください、ゆはのピン……ゆはの大事なピンです」

彼女は勢いつけて立ち上がり、からん……とティアラは落ちた。
まだ男の手にあつた。
触らないで。

「返して……ぐだせご。 ゆせの……陽ちゃんの」

ぱき

え、と思つた。

折られて、ぱらんと床に落ちた。

え……

なんで……

ゆはのひん……

見上げる。責める。黒い男。

「お前の『陽ちゃん』の脚も折つて欲しいか？」 桂木夕葉

冷酷な微笑。

これが男の本当の姿、上藤朔太郎の本性だった。
屈んで、ざゅつヒュンの欠片を集めて握る。

走つた。

手を伸ばす。

ノブを掴み、ぱたんと開け、廊下に出た。

長い廊下を走る。

早く、早く。

逃げなきや……

家を出た。

悪魔の家。

早く……遠くに……

降り止まない雨が頬を濡らしていった。

ざあざあと雨が降つていて。

肩を打ち頭を打ち忽ち体から熱が奪われていった。

霧崎天輔は薄暗くなり始めた家への帰り道をやや急ぎ足で進んでいた。家に辿り着き、玄関を開けると同時に明るい光と暖かさが彼を包み入れる。次にはぱたぱたと足音が近づいてきた。

「お帰りなさい、天！」

ぎゅうつ、と抱きつくるのは彼の母親だった。

銀色の髪と碧い眼の、フランス人の母親。彼女の実家で彼は育ち、中等部から現在通う修学院高校に入学した。その時母親は未だ二十代の後半だった。後妻ではない。父親と『恋に落ち』（この点彼は疑問を持つている）彼を生んだのが十七の時だったのだ。

この母親は夫似の一人息子が可愛くて仕方がなかった。職業柄父親が頻繁に（現在も）海外赴任していることもあってか、彼に愛情が独占されたのだった。

「天、濡れています」

彼女は吃驚した。本当に、びしょびしょだった。

「大変です。お母さん、すぐにタオルを持てきます。それとすぐ

にお風呂に入らなければ。 けれどまだ沸いていない……」

「シャワーでいい」

大変な手落ちをしたように長い睫を伏せる傍ら、漸く抱擁から解放された彼は母親をどこやれやれと廊下に進む。この帰宅毎の抱擁は突き放したりすればもう数日も酷く落ち込むもので、彼にとつてはこの数秒だけを我慢する方がずっと楽だった。それにキスを浴びせるのはやめてくれと讓歩はしてもらっているのだ。

「お背中流しますか？」

彼に溜息癖が付いているのはこの母親が原因かもしない。

その頃。

桂木夕葉はぼつぼつと道を歩いていた。

雨は土砂降りである。それ以上に彼女の心はずたずただつた。ピンが壊れただけで、と思うかもしれない。

だけど壊れたのは全てだったのだ。

この、今見えて見るとウェディングドレスを連想させるような白いレースのドレス。

婚約指輪。ティアラ。プロポーズ。

……言葉 契約事項では分かつていていたし守るつもりだったのだが、初めてはつきりと視覚化されて、あの男との婚姻が認識されたのだった。

今日が何の日だったか

今日は、彼女の誕生日だった。

16歳。

即ち結婚が可能になる年齢。

なんて自分は甘かったのだろう。

……どこかで、ずっと先のことだと思っていた。

それまでに

確かに彼女の夢だった。

いつか王子様が現れて彼女の前に跪き、恭しく手を取られて結婚を申し込まれるのが。

だけどそれは王子様であって、決して悪魔からの求婚ではなかつた。

それが彼女の夢を^{ながめ}えるように残酷に再現されたのだ。いつも無理やりなら良かつた。あんな、脅迫であるのにあたかも合意のように「はい」を言わせようとするのは卑怯だった。

陽ちゃん……彼女の王子様は、どうして今颶爽と現れないのだろう。彼女がこんなにも苦しんでいるというのに。しかしそうして彼女はどこかで信じていた。いや今までどこかで信じていた。彼が救い出してくれるものと。どんなお話だって、お姫様は一度捉われの身になつてから、必ず王子様が悪者から救い出してくれるのだ。

だけど……もつ……

王子様と彼女を繋げる魔法の道具は、碎かれてしまった。

もうすたずただつた。

暗い闇。

カンカンと音が聞こえた。
彼女は考えるのを止めた。

死
死んじやいたい……

王子様のいないお姫様……

ふらふらと、彼女は踏み切りの音に近づいていった。

カンカン
カンカン……

とある父親の拾い物

「頼むから出て行ってくれ

と彼は母親を風呂場から押しやつていた。

熱いシャワーを体に浴びてふつと漸く息を着かせた時、からと背後に音がして、振り返ればタオルを体に巻いた母親がいそいそと侵入してきたのだ。辛抱強い彼だったが、流石に若干のいらつきを込めて華奢な肩を外へと押し出した。

どうして鍵がついていないんだ。

それが彼の思ひことだった。もつと、家のあらゆるところに鍵を設けるべきだった。

しょぼんとした母親だったが、愛する息子に「風呂上りに何か食いたい」と言われて合点し、意気揚々と「何か」を作りに台所に向かった。食事は料理人さんが仕込んでいくてくれたのだが、多分追加のデザートのことだろう。早く作り始めなくては。

それで彼は、風呂につかる時間は確保できただろうな、と湯気を上げて溜まっていくお湯を見た。

彼女得意のチエリーパイをオープンに入れた時、玄関のほうで一度目のがちゃ、が聞こえた。なんだろうと思いつながら、しかし思い当たることもあって急いでエプロンを外しばたぱたと走つていく。

「旦那様！」

彼女の夫だった。指折り数えて間違いなく、明日に帰つてくる予定だった。驚かせようと息子には内緒にしてある。　ドイツでの赴任が終わり、家族三人揃つて生活ができるといつ夢の日々が始まるのだ。ご馳走もたくさんに用意していた。

しかしそんな些細な疑問など一瞬で吹き飛ぶ程、「嬉しい」に違ひなかつた。

「お帰りなさいませ、旦那様！」

彼女は飛びついた。ぎゅうり、と抱きしめ抱きしめ返されたかつた。

しかし阻むものがあつた。何か白いものを抱えていて

「ただいま、愛しいロゼット！」

彼は屈んで愛らしい妻の頬にキスをする。

「それは……？」

微笑をして答えるよつに包みを差し出した。

「さあ シンデレラかジユリエットか、お前にお土産だ」

彼女は喜んだ。
小さな女の子 丁度、これくらいの可愛い天の妹が欲しかった
のだ。

+

天輔は仰天した。どこで仰天したかというと、風呂場だった。
彼が湯に浸かっていると、からと突然戸が引かれ現れたのは何年
振りかの父親だった。そして腕に抱えているのはずぶ濡れの、見間
違いで無ければ 気を失った同級生だった。

「邪魔だ」

再会の一言を述べるとそのまま侵入してきた。流石にそれを撃退
するのは骨が折れそうだったので、彼は最良の判断としてすぐにそ
の場を脱し母親を呼びに行つた。

びつじて鍵が付いていないんだ！

これほど心の叫びが響いたことはない。

同級生は速やかな彼の判断によつて母親（『父親』ではなく…）

に洗われ、いつの間にかすやすとした寝息を立てながら両親に挟まれ居間のソファに座らされていた。

「 で、

向かいのソファで彼は溜息を吐いて言った。

「どういう状況なんだ？」

彼の両親は顔を見合させた。そんなことは見て分かるだろう。敬愛すべき一家の父親が数年ぶりに帰宅し、可愛い妻には待ち望んでいた娘を、成長した息子には妹を 小さな女の子を連れて帰ってきたのだ。どうして手放しで喜ばないのでだろう。

「ふざけるな

『まとも』な彼は一蹴した。そして彼が説明をしてやらなければならぬといつだつた。

「こいつの名は桂木夕葉、俺の同級生だ。ちなみに工藤家の縁者で、どうこう経緯か知らないが誘拐でも知れたら厄介な事になる」

「 誘拐？」

父親は全く呆れた、かつ憂いのある表情で妻を向いた。

「一体いつから、俺の息子はそんな物騒な物言ひをするよつになつたんだ？」

「『めんなさい』……ロゼは言葉に気を付けたつもりなのですけれど、日本語は少しむつかしくて 天は悪くないのです」

母親が申し訳なさそうに言つと、父親は軽く首を振る。

「勿論お前が悪い訳がない。育てた人間がどんなに清く美しくたつて、何故か捻くれた人間が育つことがあるものだ」

彼は苛々が順調に蓄積されていくのを感じていたが、同級生をこの両親の間に放っていくのは危険だつた。さつきこの父親は彼女を湯に入れて「洗おう」としていて、母親もそれに何の不思議も感じていなかつたのだ。濡れ冷えて可哀相だからと それは確かにそうだが。

ふう、と何故吐かれなければいけないのか分からぬ溜息を吐かれて父は漸く答える。

「まあお前が求めている単調な答えとしてはこうだ。帰宅途中に踏み切りに差し掛かつたところで、雨の中線路の上で倒れている女の子を見つけた。心ある人間の当然の行為として保護をした、と

「え」

母親の想像とは少し違つていたようだつた。

「お空から頂いた子ではないのですか」

「そうでないとは言い切れないな」

「同級生だつて言つてんだろ」

本当に辛抱強い彼は、苦虫を噉み潰しながらも両親の誤りを指摘した。

リトル・プリンセス

「夕葉」

ん……

彼女は目を覚ました。
目の前に……大きい

「天ちゃん……？」

くす、と口元が微笑した。

「おはよっ、夕葉」

いつもよつ低くて深い声。その微笑する口元が額に被さる時

「ふざけてんじやねえよ」

もつと後ろから聞こえたその声にはつとした。この人、天ちゃん
じゃない。目も黒い。

「おはー！」

は、ぱっと起き上がった。いきなりだつたが、予測済みのよつて
田の前の男の人はひょいと避けた。

「やは　死んじやつた？」

「やうなのか？」

「何でだよ」

呆れ声で言つたの声。眩しいのも慣れてきて、焦点が合つ。

「天ちゃん……！」

ぼり、と涙がこぼれた。何故だか分からぬ。ぼろぼろ零れ落ちた。

「いめんなさい……」

ぼろぼろ零れて、分からぬのことも謝らなければならなかつた。

「いめんなさい、やは、いめんなさい……」

天輔は戸惑つた。突然涙を溢して謝り出した女子にどう対応したらいいか分からなかつた。

「反省してくるなら、」

彼の父親は小さな頭にぽんと手を置いた。茶色の瞳を覗いて言つ。

「もう叱る必要はないな？」

彼女は泣いた。

大きな胸にしがみ付いて、わんわんと声を上げて泣いた。

彼はまた少し父親が嫌いになつた。

+

「たくさん食え」

あんと開けた口にチェリーパイを入れられて、夕葉はもぐもぐと口を動かした。

すっかり、懷いていた。

「旦那様、口ゼも」

くいぐい引つ張つてあんと開けた口にもまた入れてやる。

父親の隣に母親、向かいに同級生、天輔は彼女の隣の席で黙つて食事をしていた。尤も普段の食事でも彼は寡黙気味だつたが。

いつもの夕飯時、一方は構つてもらえず一方は構われたくもなく、いざれにしろ寂しさを覚えていたのでその夜は二人共が目いっぱいに甘えていた。過剰な甘えぶりには鬱陶しさを覚えていた天輔は矛先が変わつてほつとしている筈だ。

彼は食事を終えさつさと立ち上がつた　ところでふと父親が気がついた。

「ロゼット、手伝いの姿を見ないが？」

「あ、お手伝いさんは夕迄にしでもらいました。天と一人になりましたいので……」

「ほお」

嫌な予感がした。何か言葉が足らないんだ、母親は。しかも何故類を染める？

「天輔、母親の手伝いはしているか？」

「……」

「旦那様、天はお部活で帰つてくるのが遅いので」

「今は帰つているだろ？？」

彼は無言で、済んだ食器を片付け始めた。

「あ、天。大丈夫です、お母さんがしますので」

立ち上がりかけるのを父親が引き止める。

「ロゼット、かわいい子には旅させよとこの言葉がある」

「可愛いお子には足袋を……はい、旦那様」

よく分かつてないのに納得したようにこくんと頷いて、今持つて来ます、と言うのを男は後でいい、と微笑し兎の小首を掴むような感じで彼女を止めていた。

食事が終わると、夕葉は人の体温に気持ちよくなつてすやすやと

眠りに着いた。

「旦那様、口ゼも」

抱っこされているのを代わってほしくてくいくと弓張ると、微笑する男に頭を撫でられる。

「口ゼ、膝は娘に譲つてやつたらどうだ?」

しゅんとするが、男が髪を搔きやつて耳に何事か囁くとほつと頬を染めてこくんと素直に頷く。後は大人しくしていた。

「 そろそろ桂木を送つてやつた方がいいんじゃねえか」

ちらと時計を見て、天輔はとうとう口を挟んだ。彼は彼で幾らか義務を感じてこの同級生を放つて自分の部屋に上がってしまうのを控えていた。本来は父母がいちゃつくような場に居るつもりなど毛頭なかつたのだが。彼としてはそろそろ役目も終えていい頃合いだつた。

門限が六時だと言つていた もう八時を少し回つている。
しかし。

「馬鹿だな、お前は」

呆れた様に言われてむつとした。

「少し懲りた方がいいだろ? まあ、後小一時間程はな?」

懲りた方がいいとはあの工藤朔太郎に言つているのか。一体何を知つた被りなのが知らないが。

「何か知つてんのか」

「さあ？」

相変わらず気を逆撫でる、その無駄にはぐらかした考え方。知つていようといなからうとこの考え方だらう。まるで、もし知つてもお前が知る必要はない、と言わんばかりの。

「警察に動かされたらあんたは困るんじゃないのか？」

くす、と父は笑つた。

「なんだ、お前は実は俺が政府で動く傍ら犯罪シンジケートにも通じている、とでも思つていいのか？本当にお前は想像力豊かで羨ましいな」

それから続けて、

「直観的に言つと、何か訳ありだな。お前のこの同級生は」と言つ。

「……桂木は、」

天輔はそれから黙つた。昼休み、何故それを自分に言つたかは知らないが

「『『工藤朔太郎』の婚約者だとか？』

「何で」

父親はくつくと可笑しそうに笑う。

「本当にお前は読みやすいな。良かつたな、本家に生まれなくて。お前には絶対向かない職業だ」

これは遺憾だった。彼は常に仏頂面で、むしろ表情が読み難いと言っていた。というかこういうことが嫌で自然とそうなったのかもしれない。読心術から逃れる為に。

「お前のその表情！ 家出、故郷太郎氏と工藤家の事情。どうやら遺産がらみで婚約はしたが恋人未満ってところだな。中々忘れられない人がいるらしい」

男は何かを包んだハンカチを開き、自分だけ見るところと笑つた。

「 そこにお前が加わるとなると、事は少々複雑微妙に展開されるな」

「何で俺が加わるんだよ」

仏頂面に言つと、

「失礼。『未だ』だつたか」

彼はこの、すべての筋書きを知つてゐる　如き物言いの父親を睨んだ。突然現れてこうだ。

「 そう睨むな？ 今回は存分に端役を愉しませて貰おう

愉快で堪らなさそうに笑つてから、隣で大人しくしてゐる妻に、なあ口ゼ？と問いかける。

「はい、田那様」

と話も分かつていいだひつて夫に合わせて嬉しそうに答えた。それから軽々立ち上ると腕に抱いた少女を息子に差し出す。

「小ちなお姫様は頼んだぜ」

は？ 　と言い掛けたが、なんと落とすよつた素振りに反射的に立ち上がり受け止める。が、人の体 初めて抱えたそれは存外バランスが必要で思わずぐらりとよろける。

「ふむ」

と一度軽く頷いてから、体幹が崩れているな、と呟いて。「サッカーでも始めたか」と何か可笑しげな顔をした。む、と思い睨んで返す。だつたらなんだ。

「工藤君を呼んだら教えてくれ」

軽やかな微笑で事も無げに言い放つ男に向かつて、あんたはどこに行くんだよ と返す間もなく、

「仕方ないだらう。ロゼがもう待てないって言つんだから」

と妻の手を引いて行つてしまつた。母親がその腕にぎゅっとしがみ付くのを見て、彼も諦めざるを得なかつた。

父母が行つてしまつと部屋は静まりかえり、くつくつこつこつ音に気がついた。

腕に感じるほの柔らかさに気まずくなり、田を背けながらもそれをそろそろとソファに下ろした。

重みで少しソファは沈む。

夕葉はそれでもくうくうと寝息を立てている。
全く、神経が細いんだか太いんだか……。
奇妙な女子だ。

「桂木……」

呟いてみでから、彼も背もたれに身を預けた。

ベットに男が腰を掛け、女は乗り上がりつてその背に包帯を巻いていた。

背は一面に赤く擦れ、斑に皮が剥がれて血が薄く滲んでいた。

「旦那様、お痛いですか、旦那様……」

「風呂に入つたら染みるかな まあ、その程度だ」

心配そうな背の声に男は笑つて答える。

「かんかんに飛び出してはいけません。とても危ないのです……」「そうだな、飛び出したら危ないな。きっと教わらなかつたのだろう」

憂う声音に女は遠慮がちに口を開いた

「旦那様…… ゆはちゃん 口ゼがお風呂に入れた時、」

「ああ、口ゼ、お前が心痛める顔を見たくなかつた」

男は少し首を振る。

「一体何が可笑しいだろつ。人に怯え、焦がれることが。俺達は

「

月を閉ざす曇天を覗き男は問つ。女は答えた。

「お父さんとお母さんです、田那様」

「ちつちつに違いない、愛しいロザリット

俺の眞実」

柔らかな微笑をして包帯を巻き終えた女の手を取る。やつして自然に男と女は唇を重ねた。

「ん……」

「じのんと寝返りを打つ、のをうりと見てそれからまた時計に目をやつた。もうそろそろ一時間になる。

小さな同級生は、ここがすっかり安全な場所だと信じやすやと寝息を立てている。少しだけ体を丸め、それで彼の座るソファに収まっていた。

「よつちやん……」

田覚めたかと思ったが、幸せそうな笑みを見て自分ではない方だ
りと田を逸らす。
それにしても……

『婚約者だ』

何故、桂木が。

どうも合点がいかない。桂木夕葉が資産を目当てに結婚を望むとは思えないし、工藤朔太郎が幾多の候補の中から彼女を選ぶのも分からぬ。あの合理的な男にとって、親類との婚姻に何の益があるのだろう。どの界にも桂木という名は聞かないというのに。そして「日々谷陽介」はどこに行つたのか。

日々谷陽介の失踪と桂木夕葉の婚約

関係があるのかもしれない。

……例えば、故朔太郎氏は孫娘の桂木夕葉を非常に可愛いがついた。しかし争いを避ける為に遺産相続はさせてやれなかつた。そこで工藤財閥の跡継ぎになるであろう長男の息子との結婚を思いつき、それを遺書に盛り込んだ。それは桂木夕葉にとっては的が外れた『幸せ』の遣し方だつたが、これに巻き込まれた孫の朔太郎は遺産を相続する為に何か横暴な手段を講じて彼女に結婚を迫り、約束させた。しかし彼女の幼馴染であつた日比谷陽介は実は彼女に想いを寄せていた

『日比谷陽介がJFCに行くでもなく強豪校の推薦も蹴つて地元の公立高校に進学したのは、「国立に連れて行く」と約束した南ちゃん的な存在があつたからだ』

と力説された早川説を片隅に置いて天輔は推察する。

そして桂木夕葉の婚約を知つた日比谷陽介は高校サッカー界から姿を消した……

辻棲が合わなくもない。しかし横暴な手段と言つて
すやすやと無防備に寝てゐる……ちょっと開いた、小さな桃色の
唇……

「 はあつ 」

腹の底から吐き出すように溜息をついた。一体何を、こんな

「三文ドラマの脚本でも考へてゐるのか?」

びくつとして振り向いた。戸のところに父親が立つていてくすぐ
すと笑つていた。

か、と一気に顔に血が昇る。断じて声に出していない。だから、
何で ……いや、熱くなつては益々面白がらせるだけだ。

「 ……早かつたな 」

ぼそ、と言つた。実際、もう帰つて来ないで自分が一人工藤朔太
郎と向き合つのを愉しむつもりかと思つていた。

「まあ、口ゼが頑張つてくれたからな」

無視。

「偏見だな……」

無駄に物憂げな溜息。

「偏つた思考からは眞実は見出せないぜ?」

無駄に氣障な台詞。どこの探偵だ。

「 といひで連絡はしたか?」

黙つたまままでいると、父親はやはりどことない微笑のまま黒電話の方へ行つて指を掛けた。意外に自分で動くつもりもあるらしい。ジーー、ジーーと回す。逃げ出してきた小動物はすっかりと安心しきつて眠つている。

「桂木に訊かなくて良いのか？」

そう言つと一瞬手を止め、

「思いやりのある子だ」

と微笑んでからしかし構わず回し切り、むつとするだけに終わつた。

しかし電話が繋がつたかと思つと一言三言話しただけでちんと切つてしまつた。

「天輔、面白いぜ」

そして振り返つた時は、どうやら確かに何か面白いと思つているような表情だつた。泰然とした笑みではなく、どこか子供が新しい摺理を発見した時のような。

「何が

余程の事だらうと思つてつ投げやりに訊く。

「工藤朔太郎が電話に出ない」

何が……面白いのか理解不能だ。拳句にくすくす笑い出す。

「そうか。……いいやあるいは」

意味ありげな台詞を吐き、そして勝手に一つ頷き皿を完結したようだつた。

「……何なんだよ」

巻き込んだ上での蚊帳の外、父親の帰宅から何かと鬱憤は溜まつていた。しかし彼の父は不機嫌な様子もむつとも気にせず『夙夜く』答える。

「天輔、工藤君は連絡をしてやらなくともいづれここに来るだろ?。お前の方が一枚上手だつたな?」

それじゃあお茶でもして待つてよう、カモミールなんてどうだ?、と訊いてきた所をみるとどうやら自分も一緒に待つていいべきらしい。父親と一人でお茶をするなんて気持ち悪いことこの上ない。せめてこのクラスメイトをもつ起こしあおつ

「ん……」

田を擦りながら夕葉はぼやんとしたが、またうといとと重そうに田を落とした。

「夕葉、迎えが来るぜ」

しかし田の夕葉にぱちんとシャボン玉が割れたように田を覚ます。

裏切られたような、そんな表情で父親を見ると（いい気味だ）……わゆうと自分の腕にしがみついてきた。

「天ちゃん……」

助けて、とこいつのような。だが自分もそれが妥当だらうと思つていた。

「しかし心配はあるな。夕葉が家^{うち}にに泊まつていいくと聞けば工藤君も安心して帰れるだらう」

「え」

ぼ、と頬を染めた。よく分からぬ。だがすぐにしゅんとする。

「でも……」

「大丈夫だ、工藤君とはちよつとした知り合いだからな。俺に任せてくれ」

片目を瞑つて見せると、ぼやつとしてこくんと頷いた。なんなんだ？　いい年して恰好つけやがつて、この中年が。

桂木は手招かれるままにもう父親の膝に乗つていて、なんだか猫のようになじみうらしていた。

しかし俺は先ほどの台詞には疑問を抱く。

『霧崎家の人間だな？』

桂木を送り届けた際の工藤朔太郎のあの言葉には好意的なものは一切感じられなかつた。むしろ嫌悪と警戒だ。「ちょっとした知り合い」が何なのかは分からないうが、確実に相手側には悪い印象しか与えていないだろ？

「天ちゃんのお父さん……とても格好いい」

だばだばのスウェットを着て、桂木は頬をりんご色に染めた。その寝巻きといつのは自分が貸すはめになつたものだ。

何故こういう状態に陥つたかと言うと、『口ゼはもう寝ている』からだ。人のものを勝手に使つてはいけないと。いいや違う、面白がつていてるだけだ。桂木の手前、俺が睨み付ける事もできないのを。それにしても居づらい。ここは自分の部屋だというのに。

「桂木……」

そろそろ出て行けよ、と言いかけて口を噤んだ。彼には扱いが分からなかつた。日下や今村や、ああいう女とは違う。母親はすぐにもそめそするが、立ち直りも案外早い。三日も立てば忘れてまたに

「」にこと能天気にかつ過剰に構つてくる。

だが桂木夕葉は違う。人から不当な扱いを受けても黙つてそれに耐え、耐え続け、そして突然ぱりんとガラスのように壊れてしまいそうだった。自分の分で一筋も「ヒビ」は入れたくなかった。

彼は暫く困つていたが、夕葉がちらとベッドに目を向けた時にはその居づらさは頂点に達していた。しかしそだ甘かった。それからなんと寝巻きをずり落としながらとことことそこへ向かつていい、ベッドのところへくるつと振り向く。

「天ちゃんは、手前と奥とビツカがいい?」

「……」

変な汗が背を流れた。あの親父……！

「桂木、お前の寝る部屋は別に用意してある」

よく言えた。これなら傷つきはしないだらつ。実際使いもしない客間が毎日整えられてある。

なんだか眉を下げた。これでも言い方を間違えたか?

「天ちゃん……もしかして……」

田が潤んできている。慌てて言葉を足した。

「嫌だとかそういうのじやねえ、俺は 寝相が悪い」

なんなんだ、これは。

こんな時に 初めてあの同級生達の存在を欲した。あいつらなら上手く

『桂木さん、朝起きたら黴かびが移ついてもいいの?』

『 ゆ、ゆはっち……それではわわ私と一緒にのお布団に入るのはどうでしょうか。決して変な意味ではなく』

『桂木、そういうのはもうちょっと後にしような。ほら、お前の布団に連れてつてやるから』

……上手くやつてくれるに違いない。

「 ゆは、」

『 ますんとベットに腰掛け少し顔を俯いた。

「 変?」

答えに窮した。その通りだ。

「 どうしたらいい?…… ゆは、お友達の家にお泊りをするのは初めてで……」

なんだか分かつた。そうだ、並外れて人と感性が外れているという訳ではないのだろう。

彼も早川宅に泊まつた事はあった。確かに練習の後、「サッカーを志すなら絶対に読んで置かなければならない漫画がある」とか言われて少しのつもりで立ち寄つたところ、その家族には非夕飯をと言われ、そしてそのまま泊まつていけと半ば強引に確かにパジャマを貸して貰い同じ部屋で寝て、それが自然だった。

いや。

彼は冷静だった。

うつかり「有り」に判定負けしそうになつたが、そんな筈はない。そういうのは同姓の場合だ。こういう場合男の被害は大したこともないが、の方の風評には著しく関わるだろつ。待てよ……そもそも桂木は「女」か？

いや流石に今のは失礼だ。

彼がこのような思考を巡らせ、その間彼女は癖で頭を空っぽにしていた時

『 』
『 』

階下で人の話し声が聞こえた。

押し入れの彼女

夜の訪問者！

またぱちんとタ葉は田覚え、途端にびくつき出して田をうりうりさせる。

そして何を思ったかベット下の隙間に潜り込もうとした

「桂木！」

彼は止める。掴んだ襟首がぐいんと伸びて白い背筋が覗く。はつとして離す。

彼女は無事にもそもそと潜り込み、そしてけほけほと咳をした。埃がたまっていたのだ。

自分で掃除するからと人を部屋に入れないようにしていたのだが、そう頻繁な掃除は怠つていた。それにベット下には、兎に角彼は彼女の健康の為に引きずり出さなければならなかつた。

「桂木、もっといい隠れ場所がある」

流石に居心地が悪かつたのか少し白っぽくなつた彼女が素直に這い出で来る。彼も大分彼女の扱いに慣れてきたのかもしれない。

そして髪に絡む埃を少々摘まんでやつてから、クローゼットの空いてる段に押し上げた。 実際、工藤朔太郎が絶対にこの部屋に来ないという保証は無かつたし、自分としても理事長の婚約者が自分の寝巻きを着て自分の部屋にいるという事実を目撃されるのは避けたかった。下手をすると冗談抜きで退学になりかねない。

彼らがあたふたしている時、階下ではまさしく工藤朔太郎が霧崎家を訪れていた。

「やあ、久しぶりだな？」

夜の訪問者は思わず人物の出迎えに畏まるが、男はくすりと笑つて招き入れる。

「用件は分かつていて　さあ、上がつてくれ。朔次郎君？」

応接間に一人男がいる。
瞼を閉じてじつとしていたが、そうすれば余計に時間は長く感じられた。と、扉が開く音がして目を開く。若干の緊張をして振り向いたが入ってきたのは盆を持つた男一人で、彼の婚約者は連れていなかつた。

「紅茶はダージリンで良かつたかな、朔次郎君？」
「お構いなく。それと朔太郎です、霧崎さん」
「失礼。年は取りたくないものだな」

悠長に笑つて、男は銀盆に載せたティーカップに紅茶を注ぐ。そ

の片方を客の前に置くと、自分はカップの取つ手を軽く摘み上げそのまま立ち飲んだ。それが自然の飲み方であるような都会的なシリット。

そうして飲み干したところでカップを置き、寛いだ雰囲気で腰を下ろす。

「さて、何の用だったかな、朔次郎君」

「朔太郎です、霧崎さん」

辛抱強く答えるが最早わざとにしか思えない。

「それでもお祖父様が逝去されたばかりで君も辛いだろ？」

だからと黙つて人の名を恣意的に一字違えるのは普通の感覚なのか？

「お心遣い有難う」や「こまく、霧崎さん。御教示など頂きたいところですが夜更けに長居させて頂く訳にも参りませんの」

「いいやそれは気にしないでくれ。どうやら時差呆けで夜は暇をしそうだ。そうか、君がそう言うなら朔次 失礼、紛らわしいな。工藤君、是非今夜はうちで飲み交わそうぜ」

彼は丁重にお断りした。そしていとこを一晩預かって貰う事への礼ともう自分は帰る旨を告げる。しかし男は何故だか驚いてみせた。

「君は俺に訊きたい事があつて来たんじゃないのか？」

はあ？内心思つてはいるが、極真面目な顔をして言つ。

「世界一可愛い妻を落とした俺に」

「…………」

「うううふざけた人間は苦手だ。」

「工藤君、感覚でものを把握する型の女に理詰めや利益で迫つても心は動かないぜ。特に君のいとこは対人感覚が鋭敏で極端だ。そういう場合第一印象が大事なんだが まあ君はもう手遅れだろうが、未だ諦める事はない。真心を込めればきっと察知してくれるだろう」

何が始まった……が、婚約者だということは息子から聞き及んでいたとしても、何故いとこの性格や自分への第一印象までもが分かるのだろう。自分とは何年も昔に一度会つたきりで、従妹と会ったのは今日が初めての筈だ。

「要点は単純だ」

男は微笑して、ガラスボードからグラスと琥珀色のウイスキー瓶を取り出した。男は微笑して、ガラスボードからグラスと琥珀色のウイスキー瓶を取り出した。

「体に教えてやることぞ」

「何も特別なことでもない、君のライバルだつてそうしたことだ。体は正直なものだ、現実に陽だまりがあれば記憶の陽だまりに縋つて凍える必要も無くなる」

「…………」

「唯問題が、と男は眼を向ける。全て見透かしていくような、黒の瞳と微笑。」

「君が君を失つたといつてだな」

「……」

「新月 巡り、有つて無いもの……面白いな、『上藤朔太郎』君。まあ今夜は飲もうぜ、凡ての廻り合わせの数奇を祝つて」

片目を瞑り、男はロックグラスを差し出してきた。

さて上階に戻る。

時間はもう〇時を打とうとしていた。
から、

突然クローゼットが内側から開く。爪を切っていた彼は思わずば
ちんと深爪をしてしまった。あれからかたりとも音がしなかつ
たので、押入れに押し込んだ同級生の存在はすっかり彼の意識の外
となっていたのだ。

桂木夕葉がひょこんと姿を顯す。

「矢ちゃん……」

何か言葉にして貰わないと分からんんだが、何か訴えるような
何か言葉を望んでいるような心細氣な顔。ちらちらと時計を見てい
る。

「何だ？」

多分父親ならいじついう小さなサインで何事が分かつてしまつのだろうが、彼にとって桂木夕葉の感情表現は母親よりずっと曖昧で分かりにくかった。

チツ、チツ、チツと時計が告げる。何故か見詰め合つて、そうしてゆつくりと、少し悲しそうに桂木夕葉が口を開く……

「ゆは

三秒前。彼ははつとした。

「誕生日おめでとう、桂木」

0時になつた。

しん、とした。彼は思った。何を言つてゐるんだ、自分は。直感？ 何故だか知らないが時刻に迫られている気がして、そんなものに頼つて思わず言つてしまつた。だが。

「ありがと、天ちゃん」

途端に彼女は白い小粒の歯を見せて笑つた。

心から、嬉しさ

が込み上げてたまらないような。

真夜中、自分の部屋のクローゼットの段に少女が腰掛けて嬉しそうに足をぱりぱりさせて笑っている。なんだか奇妙な光景だった。夢だとか、クローゼットの幽霊だとか、そんなものを見ている感じの。

まあ兎に角、お互いに無事間に合つたようだつた。

「……わつ寝よつせ」

「うそ」

そうして彼と彼女は自分の寝床に戻つていつた。

「あの人、未成年だぜ」

うん?と父親が気だるい様相でパンにバターを塗っている。工藤朔太郎は早朝に帰ったようだ。天輔が六時に階下に下りた時には既に彼の姿はなく、テーブルには一人分のグラスと溶けた氷入れと幾つか空の瓶が置いてあつた。

何してんだ、この親父。

シャツのままソファに眠る父を呆れた目で見ると、彼は声も掛けずにそのままランニングに出た。

それから一時間後、帰つて来ると母親が朝食の準備をして、桂木夕葉がそれを手伝つて台所にいた。そうしてすっかり朝食の準備が整うと、母親はうきうきとして言つ。

「旦那様を起こしてきます」

それから十分も経つた頃、戻る気配もないのでパンに手を伸ばすと桂木に止められた。

なんとも遠慮がちに、頼み込むような目で止めるので仕方なく空腹のまま新聞を読んで待つっていた。(桂木は戦隊もののテレビ番組を熱心に見ていた)

そして初めに呼びに行つてから三十分後、漸く一家の朝食が始まつた。

「へえ……」

適当に答えた父親はバターを塗ったパンを夕葉に渡してやつて、彼女の方はそれを喜んでむと齧つた。母親はにこにことそれを見て、交渉時かと思つたのか話を切り出した。

「ゆうはなちゃん、天の妹になりませんか？」

「……やいつ、一応俺より早く生まれてるぜ」

まともな議論は通じやうにないので取り敢えず分かりやすい点を指摘する。

しかし何故だか父親がこれに答えた。答えたのか？

「やうこりや」とて、今日は夕葉の誕生会をしよつ

何がそつこりとなんだ？ つーか何で知つてんだよ。

「ロゼット、丁度うちにぱ、」馳走の準備があるだろ？

「はい、旦那様。旦那様が帰つてくるのでたくさん美味しいものを準備してこます」

母親が得意げに答える。

「天輔、早速招待状を」

「はあ？」

「何だ、お前友達はいないのか？」

「……」

はあ、と溜息を吐いた。桂木の旦がきりきりしていたので仕方がない。

+

『夕葉の誕生会は四時がいいな……俺は寝る』

父親は朝食も余り進まずに（彼の見るとこる、自分の分はほとんど夕葉にやつていた）席を立つと、ふあ、と欠伸を噛み殺してそう言つた。

『旦那様、口ゼモ。旦那様がお気持ちよく眠れるようになります』

と付いて来る妻に微笑んでやり、

『ありがとう、口ゼ。それなら後の指示は任せていいか』

『はい、旦那様。口ゼ頑張ります』

任せられて嬉しそうな妻の頭を撫でてやつてから、一人ダイニングを出て行つた。

そして三時になる前にはすっかり目覚めた様子の父親がいた。シャワーを上がつたばかりの父親を見つけて夕葉は飛びつこうとし、しかし一步手前で躊躇つていた。父親はネクタイはしないが黒のジヤケットを羽織つた少しフォーマルな格好をしていた。

「どうした、夕葉？」

遠慮はしなくていいぜ、と手を差し伸べるが夕葉は困った様子で足を踏んでいた。

「黒……」

「黒が怖いか？」

こくんと頷く。悪い人の色。でも天ちゃんのお父さん。

悩んでいるとぐい、と引っ張られてその腕の中に収まつた。抗う間もなく目の前が塞がれたのを吃驚していると、頭から低くて心地よい声がする。

「お前と同じだ」

額がぴとと胸にくっついて、耳にはとくんとくんと暖かい音が聞こえた。とくんとくん。

眠りに誘う音。その上頭を優しく撫でられて、自然と瞼が落ちて立ちながら眠りてしまえそうだった。

「夕葉……お前が慣れるまでいつしてこてやる」

彼女はすつとそうしていたかった が、ぴんぽんとチャイムが聞こえた。

チャイムが鳴った時天輔は居間にいた。母親や手伝いの人気が手一杯なのを見て応対に出たといふ、廊下で同級生と父親が抱き合つているのを見たが何も言わずに通り過ぎて玄関に向かった。

「今日は、霧崎君」

初めて来たのは日下葉那だった。

「少し早いと思うんだけど、上がつてもいいかしら」

ちらと後ろを見るともう謎の抱擁は終わっていたので、黙つて脇にどけた。日下葉那は靴を揃えると玄関を上がりそのまま廊下を進む。

「真次さん」

にっこりと微笑んで男に対した。

「お久しぶりです。今日帰つて来られると聞いていたので御挨拶には向かおつと思っていたのですけれど、ご家族での晚餐に招いて頂けてとても光栄です」

肘に下げていた紙袋から白い小箱を取り出して差し出す。

「これ、クッキーを焼いてみたので貰つて頂けませんか。お口に合うか不安ですけれど」

男はありがとう、と軽く笑つて受け取つてから、

「もしそうだつたら勿論君を招くと思つが、」

それからちらりと隣の小さな頭に手をやつて優しい微笑をする。

「今日の催しは夕葉の誕生会なんだ。天輔から聞いていないか?」

「あら、」

初めて横に夕葉がいるのに気づいたよつこりうと見て、困った顔をした。

「そうだったんですね。『ごめんなさい、桂木さん。霧崎君からはそうと聞いていなかつたのでてつきり……』

確かに彼は言つてなかつた。というより、電話を掛けた時には彼女はお茶の稽古とかで居合わせず、もうすぐ終わるだらうから掛け直させる、とのことだつた。しかし午後になつても電話は掛かつて来なかつたので、まあいいか、という感覚でいたのだつた。

元々彼としては彼女を積極的に呼ぼうという気はなく（はつきり言つてしまえば彼自身としては極力顔を合わせたくないなかつた）桂木ともそう打ち解けている様子でもなかつたのでこういう感覚でいたのだが、確かに責任は彼にありそつた。それで彼は少し誤解を受ける言い方にも黙つていた。恐らくそういう思考まで読み越しているのだろうと何となく分かつてはいたが。

そもそも何故「そう打ち解けている訳でもなぞそつな」日下葉那を呼んだのかといつと、

「桂木夕葉の友達」が誰なのか彼にはびんと来なかつたのだ。教室での記憶を再生する

『桂木、好きなサッカー選手とかつていんの？　いや、プロの中で』……早川達也。

『ゆはりんゆはりん、好きなタイプってどんな？　え、誰それ有名人？』……今村茜。

『桂木さん、幼馴染なんてものに幻想を見ない方がいいと思つわ』

……日下葉那？

しかしあよそ一ヶ月の記憶を遡つてみても、桂木夕葉が自分との三人の他にまともに口を聞いているのを見たことがなかった。

従つて『友達を呼んで誕生会』とすると妥当な人数から言って選抜の余地は無かつたのだ。

兎にも角も招いた者たち招かれた者たちは集まり、霧崎邸にて一日遅れの夕葉の誕生会が開かれたのだった。

夜が空を支配し始めるとも「お開き」と「う」とで、霧崎家の父親が各人を車で送つていくことになつた。玄関で夕葉と天輔、そして母親が見送る。

「ゆゆりん、じゃ！ また明日～」

「桂木は帰んねーの？」

「お邪魔しました。わよひなら、桂木さん」

夕葉は嬉しそうに手を振つて招待客を見送つた。

こうして霧崎邸から人が去つていき、後片付けも大方終わると夕葉は天輔と一緒に二階に上がり（当然のようについていった）彼の部屋でくつろいだ。ぺたんと床に座つて自分の前にプレゼントを並べ、にこにこしている。

とても嬉しそうで、昨日びしょ濡れで気絶したままこの家に連れて来られたとは思えなかつた。

……今日も泊まんのか？

本人はそれ以外の可能性を考えていらないようだつた。

なんだか本当に妹ができたらこいつ感じだろうかと思ったが、それは微妙な気分だつた。夕葉は餌を貰う小鳥のように父親にすり付き、それに触発されてか母親までもが競うように甘え出す。五歳の幼児が一度に一人増えたような気疲れがあつた。といつても彼が直接の被害を受けている訳ではなく、遠目からよく疲れないなど微笑を崩さない父親を眺めるだけだつたが。

「夕葉、」

その父親が帰ってきたのでアのところまで呼び掛けた。喜んで駆け寄つていいく。

「お前を送つていいく

彼は思わず彼女を見たが、まあ、驚いていた。

笑い出しちゃうになつてしまつたが、本当に口をあんぐり開けて驚いている。

それから二三秒経つと、ふるふると首を振り出す。ほとんど泣き出しそうだった。

「俺だつてお前を返したくはない

真面目な顔をしていりこいりとを言つてゐる。そして小さな雛の前にしゃがみ込み、子供に言ひ聞かせるように下から顔を覗いて言った。

「だが俺が帰さなかつたらお前が工藤君の信頼を裏切る事になる

「可哀想に、余りよく分からぬ、困つた悲しい顔をしていた。

「都合よく常識的だな。娘だとか言つておいて」

吐き捨てる様に言つと、父親は真面目な顔のまま「あることは、と言つて自分の方に手を向けた。

「名実ともに娘にも成り得る

「ふざけんな」

父親をきつく睨んだ。言わんとすることは分かる。が、冗談にしては酷だった。桂木夕葉には婚約者がいることでは、ない。彼女には明らかに、想う人があった。それは日々谷陽介であつて自分ではない。不思議な程この内気な少女に懐かれた彼だつたが、その理由は正しく理解しているつもりだつた。

名前被りだ。

単純過ぎる理由だが、この少女は人の好き嫌いが極めて単純らしかつた。日々谷陽介にどう関係しているか それが最重要項なのだ。

だから彼は微塵も思い上がる気は無かつたし、勝手にその姿を見出そうとする彼女を厭う氣にもなれなかつた。何か事情は分からぬが、日々谷陽介はおらず、父母兄弟の存在も感じさせず、慣れもせずに工藤家に居候しているのだ。

始業式の当日を思い出す 隣の席になつた女子は陰鬱で、じつと耐えるように俯いていた。おどおどして、むしろ決して話し掛けないで欲しいと言つてゐるようだつた。

それが突然に自分に對してだけ無邪氣な笑顔を見せたのには驚いた。

多分、辛い状況に置かれているのだろう。きっかけさえあれば誰かを拠り所にせずにはいられない程に。

……だからこそ、中途半端に突き放すことが許せなかつた。
母親は本気だつた。

だが父親は現実的には無理だと知りながら、母親と同様それが分かつていない彼女に優い夢を見させたのだつた。そうして最後に打ち碎く。この瞬間が嫌で、だから彼は父親が彼女を膝に乗せて微笑

する様に吐き気がする程苛々していたのだった。

「なんて優しい子なんだろ?」

父親は感嘆した風の溜息を吐いてみせる。

「流石ロゼットが育てただけのことはある。あいつが俺に付いて来なかつた時は本当に落ち込んだものだが、結局あいつは正しい方向へ導いてくれる。きっとあいつは天使なんだろ?」

そんな事を一人で言つた後、夕葉、と呼んで向き直つた。彼女はちよつと羨ましそうに唇を尖らせていた。

「お前もきっと誰かの天使になる」

微笑んでから、小さな手に何か握らせた。彼女はゆっくりとそれを開く。そして吃驚していた。

「何で…… ゆはのびん……」

壊れてしまつた彼女のピン。消えてしまつた大切なピン。それが、すつかり元通りになつて彼女の手のひらの上に小さな花を咲かせていた。

「間に合つて良かつた」

笑つてから、しかし一つ部分をなぞつた。よつと田を凝らせば細い線があつた。

「魔法じゃない。決して時間は逆には戻らない だがお前がずっと握りしめていたからここにある。夕葉、 いつだって鍵は自分が持つていい事を忘れないでくれ」

それから彼女を軽々と抱き上げる。

「おいで夕葉。俺からの誕生日プレゼントを未だ渡していないかったな？」

頭を撫でて、 星明りだけの廊下へと消えていった。

彼は直感的に彼女はもう家へ帰るだろうと悟ったので、 扇を閉め、 未だ少し早いが部屋の明かりを消した。そして窓明かりだけでぼんやりと、 そう言えば昨日は雨だったと思い出した。長かったような短かったような。

明日の天気は何だろ？ と彼は思った。

一章、了。

月夜の奏曲

銀色のハーモニカに唇を当てて、息を吹き込む。

心が命を持つたように、音色になる。

奏で方なんて何も分からないけれど、涙を流すよりずっと気持ちが安らいだ。

そうして耳を澄ますと、綺麗な音色が木靈してくる気がするのだ。気がするのではない。微かだけれど、それは彼女のでたらめなハーモニカではなかつた。とても整つたピアノの音 オルゴールのよつな音楽だつた。

彼女はそれを余り不思議には思つていなかつた。音の妖精がいて、姿は現さないけれど彼女を慰めてくれているのだと思つていた。

だから毎晩ハーモニカを吹き、耳を澄ませ、微かな音楽に包まれて眠りに着いた。

だけど彼女だつて、妖精に会つてみたくなつた。

もしかしたら姿を見せてくれるかもしれないと思つた。

鍵を開くかどうかは自分なのだから。

そういう訳で、彼女は花のピンを差しあ守りのハーモニカを握り締めて、寝巻きのまま自分の部屋の扉を開いた。鍵は掛けないでほしいときちんと言つたのだ。夜中にトイレに行きたくなるから、と付け加えて。

音楽が聴こえて来る方向は分かつていて、いつも同じ側に耳を澄ます……

とんとん、とんとん、

て、て、て、て

歩いた事のない廊下をずっと歩いて、彼女は見当を付けた辺りまで来た。

うろうろした。

戸がいっぽいある。

けれどどれも灯りはついていない。

どうしよう？

でもハーモニカを吹いてあの人、が現れたり取り上げられてしまつたら嫌だ。

ちよつとだけ。

唇をちよつと開いてふ、と吹ぐ。

そうしたらちよつと行つたところでふ、と同じ音が返ってきた。同じ音階の、ピアノの音。てててと歩いていつて、ノブに手を掛けた。回した。かちりと開いた。

大きな窓と、弧を描く月と、黒いピアノと、黒い、人。

「やつと来たな、夕葉」

薄く笑うその人。息を飲んで固まってしまった。

「 朔太郎様……」

「本当に忘れたんだな」

やれやれと軽く首を振ると、ピアノの椅子にすとんと腰を下ろした。鍵盤に指を掛ける。

それからオルゴールの音色が流れた。

鍵盤の重さ、軽さ、音の振動が骨を伝い音色が鼓膜から脳を揺さぶる……

「この音……この音は、『知つている』

「太郎ちゃん……！」

刹那口元は微笑して黒曜石のように滑らかな瞳が向いた。そうして眼を瞑つて弾き続ける。

太郎ちゃん……なんでそう呼んだのだろう？

この人は誰だろう？いいや知つている。小さい頃の夢に出てきた

余韻を残して、ピアノの音は止んだ。

「太郎ちゃん」

駆け寄った。見上げる。あの人に見える。だけど違う。違う人だ。

「違うな、俺達の夕葉」

彼は微笑して言った。

「俺は『工藤朔太郎』の双子の弟 音楽家、工藤朔次郎だよ」

「弟……」

首を傾げたのをくすと笑う。

「呼びたいように呼ぶといい。だがお前の『太郎』はあいつじゃないのか？」

「え」

「可哀想に。結婚の約束までしたのに、時間といつ忘却は残酷だな」
なんだろう……なんだろう……花畠……夢の中…… おひめさま……

「次郎が奏でて、太郎がお前と結婚した。約束をしていた」

……思い出せない……もみじの手……白つめ草の指輪……約束をした……だけどあれは ?

『ゆは』

陽ちゃん……

「まあ、無理もない。俺達は七歳にもなっていたが、お前は三歳足らずだったからな。物心もついていなかつたのだろう」

それから彼はぽおん、と鍵盤に指を乗せた。

「『再会』を喜び、今は……もつと、今は『やひな』じゃなきや
嫌なんだつたな？ 相変わらず我慢な奴だ」

微笑して頭にぽんと手を乗せる。

「お前は本当にここまで経つても小さくな、本当に高校生か？
「やは……太郎ちゃん、もつと優しかった 気がする」

ふくと頬を膨らませる。

「俺は『太郎』じゃないからな」

細い円に田を細めてから、彼は向き直つた。

「しかし音を頼りに辿り着くとは……相変わらずお前は耳が良いな、
夕葉。楽譜も読めなければ楽器も弾かないのに」

「やは、ハーモニカを吹けます」

彼女のお守りを掲げて見せる。月の灯りに輝いて、とても綺麗で
嬉しかつた。

しかしつくと彼は笑う。

「そうか、そうだな。ソガソになる前にソはあつた

よく分からぬことを言ひ。それでなんだか暖かくて、ちょっと
天ちゃんのお父さんと雰囲気が似ていた。

「とひるで夕葉」

手を取られて、ちゅ、と音がした。当然、何が起きたか分からなかつた。

「あ……」

また……

「相変わらず音楽家の嫁になる気はないのか？」

吃驚した。それにやつぱり不思議だった。顔はそつくり朔太郎様なのに

「二重人格、といふのはどうかしら」

夕葉が昨夜の不思議な出来事を親友に打ち明けていると、脇から口を挟む声がした。

「……何言つてんだ、お前

天輔は呆れた顔で彼女　田下葉那を見やる。

「だつて、桂木さんの記憶には『太郎』しかいないんでしょ？それで姿が全く同じ人が『次郎』だなんて名乗つたら。それに『再会』

にしては桂木さんの事を知りすぎていない?」

「あの、それはふた」

「典型的な一重人格 精神病の一種よ。普段精神的・状況的圧迫下で不可能でいる願望を別人格の自分が演じるの」

「昼は硬派、夜は軟派、みたいな? きやー、それおいしいかも! 二次元では同時に存在できるし!」

きつちりばつちり話を聞いていた今村茜迄もが意味の分からぬ発言とテンションで話に混ざる。

「お前ら……」

勝手に話を聞いて勝手に話を進める女子一人に彼は「うんざり」として無視を決め込もうとした矢先。

「つてかそれって願望では桂木にアプローチしたいってことか? あの理事長が」

……早川達也までが面白げに『その線』に乗ってきた。はあ、と溜息を吐いて彼はいい加減この話を終いにしようとした。

「工藤家の子息は双子兄弟だ。そうだろう? 茜」

「うん、まあ今村プロデュース調べでは てか今茜って言った? ねえ、言つたよね? やつた! 何か知らないけど昇格してる…今のボイスに取るんでもう一回お願ひします」

「ねえ、何で急に慣れ慣れしくなつたのかしら。班を一緒になつてあげたくらいで勘違いしないでくれる? 私のことは絶対に名前で呼ばないでね、霧崎君。寒気がするわ」

「……どうだつて一緒に」

彼は本当に疲れてきて投げやりに言った。しかし、

「ほお、もてる男は言つ事が違つた。一般男子に女子の名前呼びは垣根が高いぜ」

と彼の友人でさえ囁いた。実際はこの早川達也が茜茜と呼んでいるのでつい、という感覺だったのだが。しかし確かに彼は幼馴染だつたし、下らない反論は止めた。

取り合えず話の焦点はずれたので良しとする。

「つーか……決まったのか？予定」

今は臨海学校での班別行動の予定を組んでいた。

五、六人程度の男女混合班を作り、海辺のコテージで一泊二日を過ごす、という修学院高等部の伝統行事である。ちなみに原則男女混合なのは、この間『使用人の付き添い不可』という掻があるので、バーベキューを一つするにも力仕事や料理の分業が必要と見なされている為だった。

これこそ臨海学校と称するこの行事の目的だった。

つまり、普段はほとんどの生徒が生活を使用人に依存する環境下にあるが、それはあくまで、

『しないのであってできないのではない』

ということを「学ぶ」為に開かれていた。

しかしこの『使用人不可』さえ守れば後は放任と言える程自由だった。

「テージは広い範囲を学校が所有しており、勿論管理人もいれば食事の施設もあつた。期間中ハイヤーを貸し切つて自由にどこにでも行つて良かつたし、門限はあつても零時だつた。

そのスケジュールを組み手配をするのは自分達でしなければならないが、ほとんどの生徒にとつてこの臨海学校は『時間』と『家』に縛られずに羽を伸ばすことができる楽しい行事であつた。

この言わば放任とも言える原則には子供心配の親が抗議の声を上げたこともあつたらしいが、『その後その家がどうなつたのかは分からぬ……』という噂が実しやかに流れているので参加を認めない親はいなかつた。

実際、実利的な面でもこのグループ分けは案外重要で、その後卒業生でもこの時の人脉が有効になることもあつた。第一こそつて「こういう学校」に子供を入れるのは教育方針設備元より「家の繋がり」が重視される為だつた。

さらに偏差値という点では結構の高い敷居があるので、これに入学していないということはその家の子は「届かなかつた」と見なされる、という脅迫的概念もある。

さて、そういう訳で『桂木夕葉』は生まれて初めて班決めで引っ張りだこになるという経験をした。いつもはがやがやする中ぼつんと一人動かず、どこか良心的な班か、じやんけんで『勝つた』班（露骨を避けて）に引き取つて貰うのを大人しく待つてゐるのだった。

しかし今回は違つた。同時に勧誘を受けた上、まじまじと何も言えないでいる内に勝手にじやんけんで決まりそうだつたところを、そこは天ちゃん（と達っちゃん）が『俺達の班だから』と有無を言わさず引き取つてくれたのだった。

その後はスムーズに先の班に収まった。

霧崎天輔と日下葉那は犬猿の仲だったが、今村茜が『達也と幼馴染で良かつたと思える唯一の瞬間』で霧崎天輔と同じ班になれる特権を得、親友の日下葉那は『渋々』諦める といつ一連の流れがこれまでに定着していた。

それで、今はその班行動を決めている最中だったのだが、「入れてもらった」夕葉は自分には発言権は存在しないと思っていたし、天輔に取つてはこういう類は「どうでも」よかつた。

それで手持ち無沙汰になつて夕葉は天輔に『月夜の不思議な出来事』を話していたのだった。しかしそれは他の班員から見れば「放棄・怠慢」に他ならなかつた。

「霧崎君でいつからそんなに偉くなつたの?自分では何もしないで私達を使用人だとでも思つてゐるみたいね。勿論桂木さんはその権限があるんでしょうけど」

「いつ日下葉那に言われてしまつた。夕葉はしょぼんとし、彼は倦怠氣に言つ。

「……俺が決めていいのか?」

「吃驚した、本当に主旨を分かつていないので、『話し合い』・て言葉、辞書で引いてみたらどうかしら」

「まあまあ」

『ご両人さん、と茜が笑顔で調停する。

「海に入るのはどうでしょうか、皆さん! ビーチバレー等に興じ、「お、いんじやね?」と達也が請合い、

「まあ、茜がそう言つなら」と葉那も答える、が。
「悪い……俺はバス」と霧崎天輔が止めた。

これを受けて非難の声が上がる。

「えー、出し惜しみすることないじゃん」

「霧崎君て協調性が全くないわね。何を気取つてているのかしらない
けど」

「何照れてんだよ、天輔」

それから早川達也は小突いて、

「お前、茜はともかく田下さんの水着とかこれを逃したらもう一生
お目にかかるないぜ」と小声で囁く。

彼は思い切り微妙な顔をした。友人の視覚器面を疑う、といつよう。

そして多数決とばかりに茜は決め手の一時に意見を訊く。

「ねえゅうゅう、海、入りたいよね?」

彼女はどぎまぎした。入りたくなかった。だけど仲良くなってくれ
る茜ちゃんに嫌われたくはなかった。

「やは……いいと思います。泳げないので見ています」

それでいい筈だった。

「大丈夫!泳がなくても、波に足つけるだけでも雰囲気味わえるし」

「あの、でも」

「好きな奴だけ入ればいいだろ」ぼそ、と天輔が言つと、

「まあ、やうね」と珍しく葉那が同意した。

「いなーことが協力ということもあるわ」

「いめんなさー……」とタ葉が謝る。

なんだか微妙な空気になってしまった。

「オッケー。じゃつまつ砂浜をあやぱせやぱすぬひーりと、夜は花火！いいでしょ？」

茜が明るく取つまとめると、これには全員異議もなく可決された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8893u/>

お嫁さんにしてください（工藤家の事情）

2011年10月10日13時15分発行